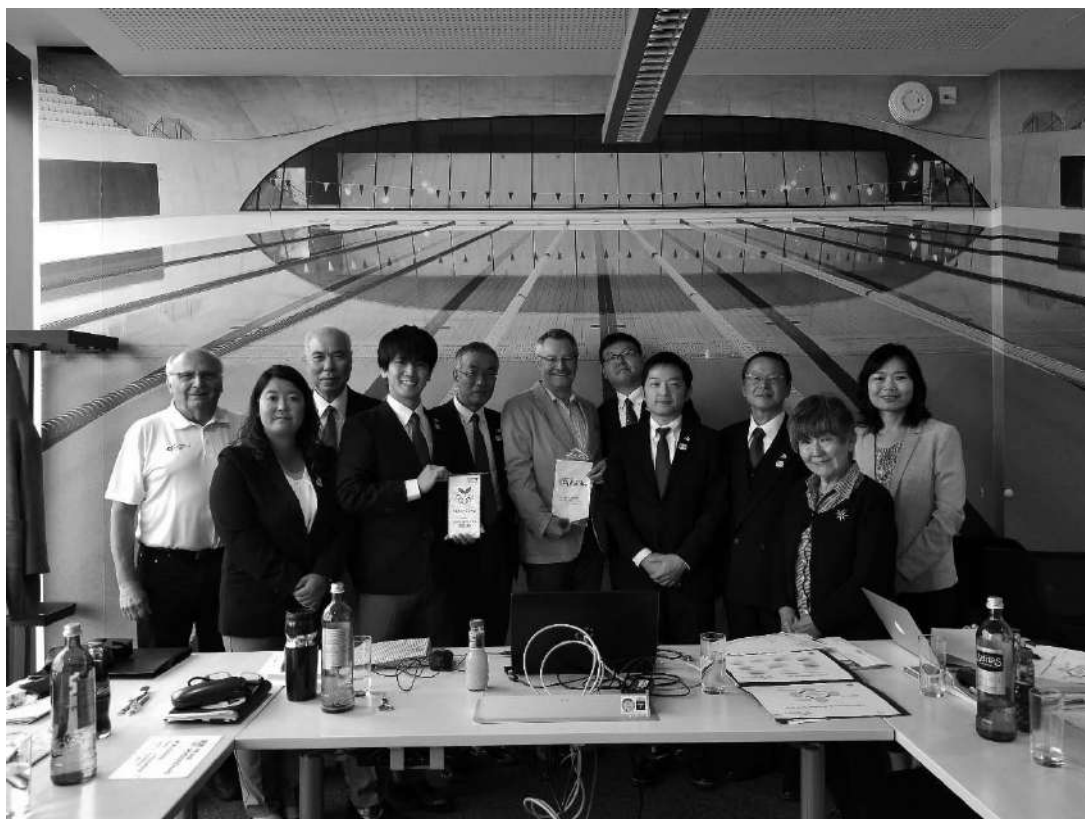


2018 年日独青少年指導者セミナー 報告書



公益財団法人日本スポーツ協会

日本スポーツ少年団

目 次

日本団派遣報告

2018年日独青少年指導者セミナー 日本団プログラム	4
2018年日独青少年指導者セミナー 日本団名簿	6

【レクチャー報告】

オリンピックアカデミー	7
オリンピックムーブメントについて	8
サッカースタジアム見学	9
ランニングマシン見学	10
ホンブルクスポーツ施設見学	13
学校訪問	15
パラリンピックビジョン	17

【日本団レポート】

塔ヶ崎 哲也	19
五月女 俊仁	25
原島 翠	31
西田 勉	38
杉山 仁夫	44
牛田 健造	50
關 忠郎	53
派遣団活動報告写真	60

ドイツ団受入報告

2018年日独青少年指導者セミナー ドイツ団プログラム・名簿	66
2018年日独青少年指導者セミナー 受入団活動報告写真	68

2018年日独青少年指導者セミナー実施要項
－文部科学省委託事業－

本事業は、日独両国の青少年指導者が相互に交流し、両国の理解と交流を深め、青少年指導者の資質向上と、両国間における青少年交流の発展を図るために実施する。

1. 主催

公益財団法人日本スポーツ協会日本スポーツ少年団

2. 期日・期間

派遣：平成30年10月7日（日）～20日（土） 13泊14日

＜日本団集合：10月6日（土）＞

受入：平成30年11月3日（土）～15日（木） 12泊13日

3. 派遣・受入人数

派遣：7名

受入：ドイツ団7名、通訳1名、日本スポーツ少年団随行者1名 合計9名

4. 日本団

(1) 派遣資格

・各都道府県・市区町村スポーツ少年団事務担当者、または日本スポーツ少年団有資格指導者(認定育成員・認定員)。

・原則として50歳までの者。

(2) 推薦方法

別に定める募集要項により、都道府県スポーツ少年団が推薦すること。

(3) 派遣団の決定

第1次選考：書類審査

第2次選考：第1次選考合格者を対象とする事前研修会

期間／9月8日（土）～9日（日）

会場／岸記念体育会館

5. ドイツ団受入担当区分等

(1) 来日直後および帰国直前における東京プログラム（前半：2泊／東京、後半：3泊／東京）期間中は、日本スポーツ少年団が担当する。

(2) 上記以外の全国各地における滞在（地方プログラム）については、日本スポーツ少年団国際交流受入ローテーションに基づき、関係都道府県スポーツ少年団およびそのブロック内において担当する。

2018年については、東北ブロックが地方プログラムを担当する。

6. 経費

(1) 日本団負担金 1人10万円

事前研修会場往復の交通費、出発前日集合に係わる交通費、および帰国後離散に係わる交通費については、本会が負担する。

(2) ドイツ団受入経費

上記9名の移動費、宿泊費、食費、施設入場料等の基本経費、ならびに同行通訳謝金については、文部科学省からの委託金、および日本スポーツ少年団負担金にて賄う。

(3) 本事業は、文部科学省委託事業として実施する。

7. 共通テーマ

交流における研修成果をより高めるため、両組織間で設定した共通テーマに基づき、両国の身近な問題をディスカッションなど様々な形態と方法により研究する。
共通テーマは下記の通りとする。

共通テーマ：Road to Tokyo 2020 - オリンピック・パラリンピックムーブメント

※趣旨：2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを控え、開催国と参加国での意識の違い、お互いに何を求めるか、地域に戻った時にどう生かせるか、実践するかを考える。また、それぞれが過去に開催した際のレガシーが何かを学び、次の世代に残すべきレガシーとは何かがあるか、何ができるかについて研究・協議することを目的とする。

※本事業は「Sport for Tomorrow コンソーシアム」から「Sport for Tomorrow 認定事業」として承認を受けています。

Sport for Tomorrow とは、2014年から東京オリンピック・パラリンピック競技大会を開催する2020年までの7年間で開発途上国をはじめとする100カ国以上・1000万人を対象に、日本国政府が推進するスポーツを通じた国際貢献事業です。世界のよりよい未来を目指し、スポーツの価値を伝え、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントをあらゆる世代の人々に広げていく取り組みです。

～スポーツ界における暴力行為根絶に向けたスローガン～

暴力0（ゼロ）心でつなぐスポーツの絆

日本団派遣報告



2018年日独青少年指導者セミナー 日本派遣団プログラム

2018年10月7日～20日

日にち	時間	プログラム内容
10/07(日)	16:40	JL407便にて日本派遣団到着(ターミナル2)
		スポーツシュレーへ移動、チェックイン
	18:30	夕食
		プログラム打ち合わせ
		宿泊・スポーツシュレー Otto-Fleck-Schneise 4 60528 Frankfurt am Main Telefon: 069/6789-0
10/08(月)	8:00	朝食
	9:00	歓迎式
	9:20	レクチャー・ドイツスポーツユース
	11:00	レクチャー・オリンピック・ムーブメント
	12:30	昼食
	13:30	ワークショップ・オリンピック教育
	15:30	フランクフルト市内へ出発、市内見学
	18:30	夕食(フランクフルト市内)
10/09(火)		朝食
	10:00	サッカースタジアム見学
	11:30	昼食
	12:27	スタジアム駅からS7で中央駅へ
	12:36	フランクフルト中央駅到着
	12:58	フランクフルト中央駅発、ザールブリュッケンへ
	15:00	ザールブリュッケン中央駅到着、受け入れ担当者と合流
	15:15	ホテルチェックイン
	16:00	ザールブリュッケンのヘルマン・ノイベルガー・スポーツシュレーへ移動
	16:30	ザールブリュッケンスポーツユースによる歓迎式、プログラム打ち合わせ、施設見学
	18:00	夕食
	19:00	ホテルへ戻る、ザールブリュッケン市内見学
		宿泊・B&Bホテル・ザールブリュッケン B&B Hotel Saarbrücken Europaallee 14 66113 Saarbrücken Tel.: +49 681 / 79308-0
10/10(水)		朝食
	8:30	スポーツ・予防医学研究所でランニングマシン体験
	10:00	ヘルマン・ノイベルガー・スポーツシュレーの連邦強化拠点コーチと接見
	11:30	昼食
	13:00	ヘルマン・ノイベルガー・スポーツシュレーでインクルージョン・スポーツデー
	18:00	夕食

10/11(木)		朝食
	9:00	出発
		ザールシュライフェ渓谷
		3ヶ国エック(川の合流点)
		陶器メーカー・ビレロイ&ボッホ訪問
		ビレロイ&ボッホアウトレット
	18:00	共同生活・学習支援団体のインクルージョン共同住居グループ訪問
10/12(金)		朝食
	9:30	ホンブルクのスポーツセンター訪問、スポーツ施設視察
	10:30	CJDホンブルク(キリスト教社会教育施設)視察
	13:30	ローマ博物館見学
		ツヴァイブリュッケン市内見学
		夕食
10/13(土)		朝食
	9:00	出発
	10:00	カイザーズラオターンの日本庭園見学
	13:00	ジンツハイムへ出発
	14.00-15.00	到着
		歓迎式とウエルカム・バーベキュー
	21.30-23.30	自由研修(ホストファミリー)
10/14(日)	10.00	出発
	11.00	ストラスブルでミニトレイン市内見学
	12.00	大聖堂の近くで昼食
	14.00	大聖堂見学
	15.00	自己散策
	17.00	出発
		ホストファミリー宅で過ごす
10/15(月)	9.00	ジンツハイム市長表敬訪問
	11.00	バーデンバーデン登山鉄道乗車
	12.00	マークアー山、軽食
	14.00	ファーベアベ博物館見学
	16.00	自己散策
	18.00	夕食
	19.30	カラカラ浴場体験

10/16(火)	9.00	ザントヴァイヤー基礎学校(小学校)訪問 テーマ・学校とスポーツにおけるインクルージョン
	11.00	障がい者スポーツ連盟訪問、 パラリンピックでのスポーツ助成レクチャー
	12:30	ファヴォリーテ城見学、軽食
	14.30	ノイヴァイヤー城へ出発
	15.00-17.00	ノイヴァイヤー城で食事
	17.30	柔道見学
	18.30	さよならパーティー
10/17(水)	9:16	バーデンバーデン駅、出発
	10:05	フライブルク中央駅に到着、バスでオリンピック強化拠点に移動
	10:45	フライブルクのオリンピック強化拠点視察 施設の説明、視察
	12:15	昼食
	13:30	強化拠点の選手とディスカッション
	15:00	バスで中央駅へ移動
	15:49	フライブルク中央駅からフランクフルトへ出発
	17:53	フランクフルト中央駅に到着
	18:20	フランクフルト中央駅からSバーンでスタジアム駅へ
	18:28	スタジアム駅到着 ヘッセン州スポーツ連盟スポーツシューレに到着、チェックイン
	19:00	夕食
10/18(木)	8:00	朝食
	9:30	レクチャー・パラリンピックムーブメント
	11:45	昼食
	13:00	グループ内評価会
	15:00	評価会
	17:30	フランクフルト市内へ出発
	18:00	夕食
10/19(金)	8:00	朝食 自己研修(昼食)
	16:00	空港へ出発 チェックイン
	19:20	JL408便で出発(成田空港 20日13:25着)

● 日本派遣団名簿


都道府県	氏名	性別
埼玉県	塔ヶ崎 哲也	男
千葉県	五月女 俊仁	男
長野県	原島 翠	女
石川県	西田 勉	男

※


都道府県	氏名	性別
静岡県	杉山 仁夫	男
岐阜県	牛田 健造	男
三重県	關 忠郎	男

※グループリーダー

2018年日独青少年指導者セミナー レクチャーまとめ

10月 8日(月) 11:20～12:30	場 所	DOSB
記入者	牛田健造	
説明者(役職)	フローリー氏	
レクチャーテーマ: ドイツオリンピックアカデミー		
<p>【主なレクチャー内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・加盟団体 <ul style="list-style-type: none"> →50以上のスポーツ組織 <li style="padding-left: 40px;">種目別競技団体、州スポーツ連盟 →教育と社会 <ul style="list-style-type: none"> ドイツ学校スポーツ財団、ドイツ大学連盟など ・イベント <ul style="list-style-type: none"> →オリンピックデイやスポーツに関する講演、ワークショップなどの開催 ・教育 <ul style="list-style-type: none"> →ユースキャンプ(オリンピック開催国に40～50人派遣する) →オリンピックに関する出版物の発行及び周知 ・オリンピックに関する歴史 ・オリンピックに関する考え方、今後の発展について 		
		
<p>【レクチャーを受けての学んだこと、所見・感想】</p> <p>オリンピックアカデミーに関する組織の紹介、役割を教えていただいた。</p> <p>オリンピックの歴史についても学び、今までのオリンピックから今後のオリンピックの方向性について伺うことができた。特にドイツではオリンピックに関わる選手の育成に力を入れているように感じた。</p>		


2018年日独青少年指導者セミナー レクチャーまとめ

10月 8日 (月) 13:30～ 15:30	場 所	DOSB
記入者	牛田健造	
説明者 (役職)	ヘルムート氏	
レクチャーテーマ：オリンピックムーブメントについて		
<p>【主なレクチャー内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリンピックの価値観 <ul style="list-style-type: none"> →子供の頃からオリンピックについて学ぶ機会を作っている →スポーツや国に興味を持つ ・オリンピックに関する資料作りを行っている <ul style="list-style-type: none"> (掲載内容) オリンピックの競技などの解説 開催国の文化のテーマ ダンスのテーマ 食事のテーマ など →資料などの一部はダウンロードなどできるようになっている 		
		
<p>【レクチャーを受けての学んだこと、所見・感想】</p> <p>日本国内ではオリンピックについて学ぶ機会はほとんどない。 資料もほとんどないので東京オリンピックに向けていい機会だと思った。また、オリンピックに関することや様々な国のことを学べる機会なので、是非日本でも可能なことは浸透させていけると良いと思った。</p>		

2018年日独青少年指導者セミナー レクチャーまとめ

10月 9日 (火) 10:00 ~ 11:30	場 所	サッカースタジアム
記入者	牛田健造	
説明者 (役職)	サシャ氏	
レクチャーテーマ：フランクフルトサッカースタジアム見学		
<p>【主なレクチャー内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スタジアムの見学 <ul style="list-style-type: none"> →1985年設立 森のスタジアムとの呼び方もしている →サッカー以外にコンサートなども行うことがある 小雨でも可能なように布製の屋根を完備 (大雨は不可) →ブンデスリーグ開催時 51,000 席 ヨーロッパチャンピオンシップ開催時 48,000 席 (立ち見が不可の為) →プレス席は電源とネットを完備 ・ 運営についての説明 <ul style="list-style-type: none"> →スポンサーは現在インディード (アメリカ) →プロチームの使用以外にサッカー教室やイベントの開催など 		
		
<p>【レクチャーを受けての学んだこと、所見・感想】</p> <p>プロが使用するサッカースタジアムの見学はしたことがなかったので、規模の大きさに圧倒された。プロだけでなく様々なイベントを行える施設になっていた。フランクフルト市内と違い、周辺が森に囲まれた自然豊かな場所となっている為、森のスタジアムと呼ばれており、これだけ都市に近く交通手段がよい場所で、これだけの規模のスポーツをする場所があるというのは率直に羨ましいと感じた。</p>		

2018年日独青少年指導者セミナー レクチャーまとめ

10月10日(水) 8:30 ~ 11:30	場 所	ヘルマン・ノイベルガー スポーツシュレー他
記入者	牛田健造	
説明者(役職)	イリス氏、エドムント氏	
レクチャーテーマ: ランニングマシン見学、インクルージョンスポーツデー参加 スペシャルオリンピックについて対談、パラリンピックについて対談		
<p>【主なレクチャー内容】</p> <p>ランニングマシン見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究所のランニングマシン他最新施設の見学及びランニングマシンの体験 →五月女さんが実際に体験 今回は MAX15m/min の速度で測定 (走る競技の人は MAX22m/min) 1回3分、休憩1分程度で7~8回測定 血液を採取して疲れ具合などを測定した ・所内は主にスポーツ科学とスポーツ医学に関する研究に分かれている。 →今回はスポーツ医学の部分を見学、主に今回のランニングマシンなどで 体の中のデータを取って研究している。 		
		
<p>インクルージョンスポーツデーに参加</p> <p>様々な遊びやスポーツを障がいの有無に関わらず一緒に体験した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボルダリング ・ボクシング ・レスリング ・アーチェリー ・中国ゴマ ・ボードゲーム(サッカー) ・ボールとバチを使ったリズム遊びなど 		



スペシャルオリンピックについて対談

- ・スペシャルオリンピックについての紹介



パラリンピックについて対談

- ・ボッチャで日本に行った際の体験談を話していただいた。
 - 車椅子で団体宿泊ができる施設がなかった。
 - グループホームなどの施設を利用した。
 - 利用する設備が狭い部分などがあり、実際に生活することによって見えてくる部分があった。
 - 東京オリンピック・パラリンピックに向けて、改善が必要な部分が多いのではないかと考えさせられた。



【レクチャーを受けての学んだこと、所見・感想】

ランニングマシンの見学、体験は普段行うことができないトップアスリートに対して行う身体的な能力に関する検査を体験することができた。もちろん日本でもそのようなことを行なっているが、実際に見て体験することができ、貴重な体験となった。

他にも色々な研究をされている施設で様々なスポーツの練習なども行える拠点になっていた。

インクルージョンスポーツデーでは幅広い種目のことを様々な子ども達と一緒に体験（遊ぶこと）ができた。普段遊びの中に本格的なスポーツの体験を持っていくことが少なく、基本は子ども達がメインですが、私たちも体験して大人も楽しめるイベントの内容になっていた。障がいのある子どもたちも一緒になって楽しんでいた。スタンプラリー形式になっていたのも、子ども達が競って楽しむ要素もあり今後の活動の参考になった。

スペシャルオリンピックについて話しを聞くことができたが、あまり多くの話はできなかった。私自身は知識不足であったが、今後、日本でのオリンピック開催に向けての参考になった。

パラリンピックについてはボッチャ競技のことについて、日本に行った際のバリアフリーに関することなどの話が聞けた。よく考えてみればそうだが、日本の施設で障がいのある人（今回は特に車椅子を使用している人）が団体で宿泊できる施設は聞いたことがなかったので、パラリンピックや障がい者競技の大会を開く際の難しさがわかった。自分たちですぐ何かできるものではないが、今後障がいのある人たちと一緒に何かをする際には、バリアフリーや受け入れる際にどのような点に注意が必要か参考になった。

2018年日独青少年指導者セミナー レクチャーまとめ

10月12日(金) 9:30 ~ 18:00	場 所	ホンブルク
記入者	牛田健造	
説明者(役職)		
レクチャーテーマ：ホンブルクスポーツ施設見学 CJD ホンブルク見学 ローマ博物館見学		
【主なレクチャー内容】 ホンブルクのスポーツ施設の見学 <ul style="list-style-type: none"> ・ 体育館 ・ 柔道場など 地域の大会や練習に使われている。 以前はプロ選手のチームのホームとして使っていたこともある。		
		
CJD ホンブルク見学 <ul style="list-style-type: none"> ・ 就労するための教育施設の見学 → 木工、造園(花)、電気、金属に関することなど様々なことを行なっている。 → 宿泊の設備もあるが周辺から通っている人が大部分 ・ 所内のスポーツ施設見学など 		
		

ローマ博物館見学

- ・ローマに関する遺跡などの見学

→当時使われていた設備などの見学（調理場、トイレ、冷蔵施設）



【レクチャーを受けての学んだこと、所見・感想】



州の施設ほど大きな規模ではないが体育館と柔道場などの見学ができた。
以前はプロスポーツなども行なっていたとのこと。

CJD ホンブルク見学では宿泊施設（寮？）や、所内の色々な部分でどういったことを学ぶのかであったり、スポーツの関わり方について聞くことができ、普段入ることができない施設なので新しい発見があった。

特に日本でもそうなのかはわからないが、花のことを勉強する部分と木工や電気といったことまで一緒に総合的な施設になっているので結構大きな施設と感じた。

ローマ博物館では、ローマ時代の遺跡やどういった生活だったのかを知ることができ、当然ではあるけども日本の遺跡とは違った部分が多く見られた。

2018年日独青少年指導者セミナー レクチャーまとめ


10月16日(火)	9:00～11:00	場 所	ザンドヴァイヤー基礎学校
記入者	牛田健造		
説明者(役職)			
レクチャーテーマ：学校訪問 障がい者スポーツについて			
<p>【主なレクチャー内容】</p> <p>学校施設の見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校でどのように障がいのある子どもたちを受け入れているかを見学 →金銭的な面では補助だけでなく自費でやっている部分が多い。 椅子は持ち込みなど 完全バリアフリーではなくとも各学校ごとで工夫を凝らして受け入れ態勢を作っていた(現在進行中) ・体育の授業を見学及び参加 →障がいのある子どもたちと一緒にみんなのできるボール遊びなど工夫がされていた。 →実際にボール遊びやキンボールなどを説明し授業をさせていただいた。 言葉が通じないのもあるがルールが簡単な方が細かい説明がいらないため こういったことは言葉が通じなくても同じでした。 			
			
<p>障害者スポーツについて</p> <p>パラリンピックに関連する競技スポーツを中心に話しを伺った。 →卓球、バスケットボール、バイアスロンとクロスカントリー、水泳、柔道など 複数の競技を行なっている選手も多くいる。</p>			
			

【レクチャーを受けての学んだこと、所見・感想】

ドイツの学校では障がいのある子どもたちを分けることなく一緒になって活動をしていくことを進めていました。日本ではまだそういった動きはほとんどありませんが、ドイツではバリアフリー設備が整っていないけれど、工夫をしてどうしていったら一緒に行っていけるかを考え、少しずつでも実行しているというのがわかりました。一緒に行くには難しい部分もあるようでした。

体育の授業に一緒に参加させていただき、簡単なボール遊びやキンボールを一緒に行いました。よくスポーツは言葉が通じなくてもできると言いますが、簡単なものや知っている競技であれば言葉の違い、障がい有無に関わらず一緒だと感じました。

2018年日独青少年指導者セミナー レクチャーまとめ

10月18日(木) 9:30 ~ 11:45	場 所	DOSB
記入者	牛田健造	
説明者(役職)	ラース氏	
レクチャーテーマ： パラリンピックのビジョン、障がい者スポーツの歴史、障がい者スポーツユース		
【主なレクチャー内容】 障がいスポーツについて <ul style="list-style-type: none"> ・ 国連・障がい者権利条約 →スポーツについて書かれている <ol style="list-style-type: none"> 1. あらゆる水準の一般スポーツ活動に可能な限り参加することを推奨し、促進すること 2. スポーツ、レクリエーション、余暇及び観光の場所を利用する機会を有することを確保すること ・ インクルージョンとは →塊の無い混ざり合ったもの ・ 障がい者スポーツのクラス分け →片足、両足に障がいのある人が同じ競技をする場合は時間差をつける →水泳では両足に障がいのある人、片足に障がいがある人のワールドレコードを1,000点としてそこから算出して点数で考える。 ・ 障がいの種類 →身体的、知的、感覚的などに分かれる。 ・ パラリンピックのビジョン →高い競技レベルを見せたい。 パラリンピックの歴史 <ul style="list-style-type: none"> ・ 1948年にパラリンピックの元となるものが開催 ・ 1960年のローマ大会で初めてパラリンピックという言葉が用いられる。 ・ 1989年国際パラリンピック委員会設立 		
		

【レクチャーを受けての学んだこと、所見・感想】

インクルージョンとはどんなことを指すのかと考えた時、知識不足のため明確な答えが出てきませんでしたが、今回の研修で意味と関わり方の考えを聞くことができた。

国連で提起されているとは詳しくは聞いたことがなかったですが、ドイツ、日本だけでなく全ての国々で協力して障がいのある人々との関わり方を考えていく。特にスポーツを通じて一緒になってできることを具合的に少しずつ関わりを深めていければと感じました。

パラリンピックについての組織や歴史については聞いたことがなかったので、今回聞いて、当初の頃と現在ではかなり変わってきていることがわかった。

2020年に日本でもパラリンピックが開催されるのもっと知識を深めてもっとより良い大会になるようにしていきたい。

はじめに

この日の日独青少年指導者セミナー参加に先立って行われた事前研修において、日独共通テーマである”Road to Tokyo 2020 - オリンピック・パラリンピックムーブメント”を念頭に置きつつ、「開催国として2020年のオリンピックパラリンピック後の更なるスポーツ普及を目標とした総合型スポーツクラブやスポーツ少年団の在り方」を日本派遣団として学びたい研修テーマと決めました。

私たち派遣団7名は、所属地域、年齢層、指導競技や地域におけるスポーツ少年団での立場、そしてこれまでのドイツとの交流経験などが異なりましたが、事前研修での意見交換を通じて、セミナーでのそれぞれの役割やお互いの理解を深める事が出来たと思います。私自身は、数年間ドイツへ海外赴任した経験があり、現在自分が指導している剣道競技については地域クラブ活動や各種大会などの行事に参加する機会がありました。しかしながら、ドイツ剣道連盟は日本のJOCに当たるDOSB¹の直接所属団体では無く、他種目競技との交流やオリンピック・パラリンピックへの取り組みなどに触れる機会が無かったため、今回のセミナーではこれまで接する事が無かった方々と直接意見交換出来る事に大変興味を抱き、応募・参加しました。

2週間のドイツ国内セミナーは、主にdsj²本部のあるFrankfurtでのワークショップやレクチャー、Saarbückenでのスポーツ大学の施設見学やインクルージョンを取り入れた様々なイベント参加、そしてSinzheimやBaden-badenでのホームステイおよび柔道クラブ見学、障がい者スポーツをテーマとして地元小学校訪問やパラリンピックメダリストとの対談などが行われました。可能な限り多くの研修内容に触れつつ、セミナー報告書としてテーマ毎に記します。

ドイツでのオリンピック・パラリンピック教育

ドイツオリンピックアカデミー(DOA)³のFloryさんとdsj職員のLangeさんからレクチャーがあり、一般市民や子ども達にオリンピック・パラリンピックに関心を持ってもらうために、ドイツではどのように取り組んでいるかを教えていただきました。各種イベントで大会出場選手との交流があったり、学生向けユースキャンプを行ったりと、各ターゲットに合わせた工夫が施されていると感じました。

特に目を引いたのが、オリンピック・パラリンピックを教材として使用してもらうために教師の継続教育を行なっている点や、幼稚園児から高等教育期間までの授業用教材(MACH MIT! : 一緒にやろうよ)、そしてオリンピックコンパクトと呼ばれる参加者向けの開催国のガイドブックを提供している点です。これらの教材は自国・他国開催に関係なく毎回作成されて、その内容は

¹ Deutsch Olympischen Sportbundes (<https://www.dosb.de/>)

² Deutsch Sportjugend (<https://www.dsj.de/deutsche-sportjugend/>)

³ Deutsche Olympische Akademie (<https://www.doa-info.de/>)

開催国との歴史的・経済的情報などが、対象年齢の理解度に合わせて掲載されているようです。普遍テーマである「オリンピックの価値」や「インクルージョン」に併せて、「食事文化」や「南北問題」など毎回異なる独自テーマで構成されています。またオリンピックプロジェクトウィークと題して、子どもから大人まで参加できて、オリンピックに関心を持ってもらうためのイベントを学校で行なっている地域もあるそうです。一例として、擬似オリンピックのようなスポーツイベントを行い、運動だけでなく開閉会式での催し物を地域住民皆で楽しんでいる映像を紹介していただきました。過去に Hamburg(夏)と München(冬)で住民投票によってオリンピック誘致が反対された経緯などを聞くと、一般市民の関心度が非常に高い事が伺えました。

日本でも自国開催である 2020 年に向けて、各地で関連イベントが行われていたり、教育機関向けに教材が配布されていたりすると聞きますが、開催都市である東京と地方地域との間では、一般市民の関心度にはまだ大きな隔りがあるように感じている事を議論の中でフィードバックしました。日本でも 2020 年以降も継続的な教育を通じてオリンピック・パラリンピックの価値を広めていく事で、4 年毎に開催されるこのイベントを歴史や経済だけでなく国際交流や芸術などの学習教材として活用していければ良いなと思いました。そのためには、スポーツ普及の歴史やスポーツ教育に求められてきた背景が異なる、ドイツを含めたヨーロッパを真似るのではなく、少子高齢化や人・モノの都市部集中などの日本の社会構造に適したスポーツ普及方法を自ら模索して、地域から発信していく事も必要では無いかと感じました。

その他、従来ナショナリズムの強かったヨーロッパにおいて、スポーツを各国間の友好関係を構築する一助として近代オリンピックが誕生した経緯や、アマチュアリズムやフェアプレーを基本とするオリンピック理念、近年は政治利用や商業化、ドーピング問題といった多数のリスクと隣り合わせである事などの説明も受けました。



パラリンピックと障がい者スポーツ

障がい者スポーツに関しては、パラリンピックのビジョンや障がい者スポーツの歴史について DBSJ⁴のPickardtさんからレクチャーしていただく機会と、パラリンピック水泳金メダリストであるHolger Kimmigさんと障がい者スポーツの実態について対談する機会がありました。障がい者スポーツの大きな特徴であるクラス分けに関する考え方やタレント発掘の難しさなど、生涯スポーツに携わっている方と元トップアスリートからのレクチャーで共通の話題が多かった事が興

⁴ Deutsche Behindertensportjugend (<https://www.dbs-npc.de/dbsj-aktuelles.html>)

味深かったです。ドイツの障がい者スポーツの歴史は大戦後の戦争負傷者向けのリハビリリとしてスタートして、一般的な障がい者スポーツとして今日のように広く裾野が広がるまでには相当な時間が掛かったという話がありました。私は恥ずかしながら日本の障がい者スポーツについては、メディアで取り上げられる選手や競技について、あるいは周囲の限定的な知識しか持ち合わせておりませんでした。自分の専門でないスポーツ競技は、競技ルールや競技の成り立ち、どこの地域で盛んに行われているのかといった基礎情報が多ければ多いほど、観戦するだけだとしても楽しめる事が多いです。逆にこれらの知識が無い場合は、何か偶発的なきっかけが無い限り、関心を持つことは難しいと思います。まずは現在不足している様々な情報を収集して、今回のレクチャーで学んだ事と比較する事から始めたいと思います。

他にはBaden-badenにあるSandweier基礎学校を訪問して、障がいを持つ児童を受け入れている状況を視察したり、Homburgのキリスト教青少年教育施設(CJD⁵)で、宗教・政治・音楽教育や職業訓練など様々なプログラムの中でも特にスポーツに力を注いでいるという話を聞いたりしました。一般的な学校で健常者と同じ環境で障がい者スポーツに取り組んでいくためには特別支援は不可欠で、見学させてもらった体育の授業では、生徒の移動や飲食などのサポートをするヘルパーの方が活動されていました。また授業の運営方法に関してガイドラインはあるものの、そのほとんどは自分たちで考えて、手探り状態で進めているとの事でした。CJDの視察にはHomburg市のスポーツ担当の方も同行していたのですが、市からの助成金で新設した屋外サッカー場を利用して進めているスポーツプロジェクトについて、代表の方が熱心に説明されていました。

これらのレクチャーや視察を通して、障がい者スポーツを誰でもどこでも行えるようになるためには、競技スポーツ・生涯スポーツ共に家族や地域住民など周囲から、そして何より行政からの継続的なサポートが不可欠であるという事を痛感しました。



インクルージョン

ホームステイ先で最後の夜に行われたさよならパーティーでの、地元柔道クラブ代表である Scherret さんからのスピーチで、「インクルージョンとは、単に障がい者と健常者とが分け隔て無く活動する事だけでは無く、社会的弱者である子どもや老人の社会参加、あるいは多国間や多人種間での相互自助など多様な側面があるので、今回の日独交流もインクルージョンの一部です」

⁵ Christliches Jugenddorfwerk Deutschlands (<https://www.cjd-homburg.de/>)

という言葉がとても印象に残っています。

今回のセミナーでは、様々な場面でインクルージョンという言葉に触れる機会がありました。Saarbrücken での” 2 度目のチャンス” という一度挫折した若者に音楽を通じた社会復帰を提供するイベント、同じく Saarbrücken での障がいのある児童とない児童と一緒にスポーツの楽しさを知ってもらうためのスポーツデーイベントにおいて、私たち日本派遣団も一緒に仲間に入れてもらって大いに楽しんだ事などを通じて、Scherret さんの発言の真意を体感出来ました。

ドイツでは数年前から難民受け入れ政策を巡って国家が分断されかねない状況が続いていますが、大戦後に移民政策で国の経済発展を形成してきた歴史があり、国民の 5 人に 1 人が移民であると言われる現状からすると、意識せずとも他者を受け入れる環境に幼い頃から置かれているのだらうと感じました。一方で、日本では幼い頃から周囲からはみ出さない事が求められ、かつ単一民族国家である事も後押しして、インクルージョンやダイバーシティという言葉だけが先走りしているような気がします。2002 年のサッカーW 杯や来年開催されるラグビーW 杯、そして東京オリンピック・パラリンピックの開催は多くの外国人に日本を知ってもらう良い機会になるはずですが、外国人と触れ合う事を通して、インクルージョンを考えるきっかけになるのであれば、一人でも多くの方にそのようなスポーツイベントに関心を持ってもらう活動はスポーツの枠を超えて継続されていくべきですし、本セミナー参加者としてその一助となるように尽力していかなければならないと感じています。



Sinzheim⁶でのホームステイと地域柔道クラブとの交流

今回私たちがホームステイをした Sinzheim は、フランスとの国境近くに位置する人口 1 万人程度の街で、温泉保養地で有名な Baden-baden の隣街ではありますが、ドイツ国内ではそれほど有名な場所では無いと思います。受け入れを担当して下さった柔道クラブには専用の練習場があり、同じ建屋の上階にあるスペースで私たちのウェルカム・さよならパーティーが行われました。滞在最終日には稽古の見学をさせていただいたのですが、指導者の皆さんが熱意を持って、児童から大人、そして障がい者も含めたメンバーの指導に取り組まれているのが伝わってきました。前述のクラブ代表者の Scherret さんは視覚障がい者なのですが、メンバーの道着とのコンタクトを頼りに、準備運動のランニングから乱取り稽古まで全てのメニューをこなしていました。

私のホストファミリーには 13 歳の息子さんがいたのですが、残念ながら私の滞在中は英語学

⁶ <https://en.wikipedia.org/wiki/Sinzheim>

習キャンプへ参加する事が決まっていたため、初日に彼と挨拶を済ませた以降はご夫婦と私だけの生活でした。実際にホストファミリーとお会いするまでは久しぶりのホームステイに緊張していましたが、お手製のウェルカムボードで歓迎してくれていたりと、用意していただいた個室には飲み物とお菓子が用意されていたりと、ゲストの不安を少しでも取り除こうと考えてくれた受け入れ準備や、滞在期間の気配り全てに対して感謝しています。柔道クラブのメンバー、メンバーのご家族や関係者も、盛大なウェルカム・さよならパーティーを催してくれた他、滞在中の行程全てにおいて心強いサポートをしてくださいました。帰国してからもホストファミリーや数名のメンバーとは連絡を取り合う事が出来ているので、この出会いからの交流を継続して、いつかまた日本かドイツで再会したいと思っています。

家族でも友達でも、そして初対面の人であっても誰かをゲストとして迎え入れる時には、相手の状況を理解するように努めて、相手の気持ちに寄り添い、相手の立場になって行動すれば、多少の言語や文化の壁は容易に乗り越えられる事を学びました。現在、日本のおもてなし文化は海外でも有名です。2020年に限った事ではありませんが、私たちがホストとしての役割を求められた時に、ゲストが心地よく過ごせる環境作りの参考にさせていただきたいと思います。



今回の研修に参加して、経験し得た知識を今後どのように活用していくのか

セミナーのプログラム予定が配布される前は、オリンピック・パラリンピックの関連施設を視察したり、地域スポーツ少年団に携わる方との対談をしたりするのが主な活動なのだろうと予想していましたが、前述の通り想像以上に様々な方と出会い、議論し、理解し合い、これまでの自分の生活環境からは考えられない体験が詰まった研修だったと思います。特に障がいのある方々や周囲の支えている方々と日常的に接する機会は無かったので、日本ではデリケートに扱われる話題に対して踏み込んだオープンな議論が出来た事は貴重な時間となりました。多くのドイツ人は議論する事を好み、そして相手の意見を尊重してくれると言われていますが、そういった部分が、私たち派遣団が質問や意見しやすい雰囲気を作り出してくれていたように思います。

私の所属している剣道スポーツ少年団には、現在障がい者や外国籍の方は在籍しておりませんし、私もこれまで国内で外国人剣士と稽古をした機会は両手で数える程度です。障がい者剣道と言えは世界的には隻腕の剣士が大半ですが、ドイツでは脚が不自由な剣道家を昇段審査会場で見かけたりしましたので、きっとその他様々な障がいを抱えた多くの競技者が、健全者と一緒に汗を流しているのだと思います。剣道には全国的な障がい者団体や競技大会が存在しておらず（今日までオリンピック・パラリンピック競技でもありませんが）、その是非を問う声はこれまでも多く出ています。私個人は身近な所からとはなりますが、自分の活動範囲において障がい者や外国人が指導競技に限らずスポーツに興味があるという情報があれば、まずはどのような支援があれば参加しやすい環境が整うのかという事を考え、周りを巻き込んで行動に移したいと考えています。dsjからのレクチャー内の議論で話された、「障がい者スポーツでは、全部は出来なくても部分的には出来る、ルールも理解している、その中で何が出来るのかが大事」という言葉の意味を常に考えていきたいです。

自国で2年後に開催されるオリンピック・パラリンピックに関しては、今回のレクチャーを通じて、その成り立ちや過去の経緯、そして現在抱える問題点などにより興味を持つ事が出来ました。これまでは競技そのものに注目したり競技結果には一喜一憂したりしても、開催国自体はそれほど関心が無かった事を振り返ると、そこから派生する様々な事を学んだり触れたりする機会を逃していたのだと気付かされます。2020年に向けてはセミナーで学んだオリンピック・パラリンピックの魅力を周囲と共有する事、そして自国で開催される事のメリットとして、メディアでスポットライトの当たらない部分からも得る事が出来る、スポーツの枠を超えた大会の価値を自分なりに考える絶好の機会としたいと思います。

また本セミナーでの経験を地域スポーツ少年団で共有する事によって、一人でも多くの児童や保護者の方々、指導者の方々にスポーツを通じた国際交流に興味関心を持っていただき、将来的にはこのような国際交流に参加してもらえそうな、継続的な還元活動をしていきたいと思います。

終わりに

ドイツでのオリンピックパラリンピック教育の講義、オリンピック・パラリンピック関連施設や地域スポーツクラブの視察、インクルージョンの一部である障がい者スポーツに関するレクチャーを通して、ドイツでの競技・障がい者スポーツ普及に対する取り組み方を学ぶ事が出来ました。また日本での取り組み方と比較する事によって、開催国としての在るべき姿を地域レベルで模索する機会を得る事が出来ました。

私たち派遣メンバーが本セミナーで得た事や感じた事を、所属スポーツ少年団や所属地域にどのように還元すればオリンピック・パラリンピックムーブメントに貢献できるかを考えて行動に移す事で、2020年以降のスポーツ普及に必ず貢献出来ると確信しています。また、引き続き本セミナーを含めた日独間青少年交流の更なる発展を期待しています。

最後になりますが、2週間の滞在中毎日お世話になった通訳のDeppe 知世さん、dsjのスタッフの皆様、各地方での受け入れ担当の皆様、日本スポーツ協会スタッフの皆様、所属地域スポーツ少年団の皆様、共に行動した日本派遣団メンバーの皆様、そして快く送り出してくれた家族に大変感謝しています。このような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

2018年日独青少年指導者セミナーに参加して
テーマ「Road to Tokyo 2020 -オリンピック・パラリンピックムーブメント」
千葉県 五月女俊仁

1. はじめに

今回のセミナーに参加するにあたり、全体テーマを軸として、事前に日本団の中で討議し、共通の目的意識を持って学ぶことが出来た。また、個人的にも学びたい視点を明確にした上で参加することが出来たと自負している。具体的なテーマ・視点を下記に述べてから、テーマに対しての考察とプログラムで学んだことを中心に報告したいと考える。

1-1. 日本団として掲げたテーマ

①インクルージョンのあり方

健全者と障がい者の共存という意味だけではなく、移民の受け入れや社会制度、歴史的背景の影響などをどのように受けているのか広義的に捉えたい。

②多種競技に触れられる機会作り

地域スポーツクラブとしてどのような種目を選定し、どのような人を対象に実施しているのかを把握したい。また、競技レベルなど個に応じた受け皿をどのように作っているのかを学びたい。

1-2. 私自身が設定したテーマ

①教育現場でのスポーツのあり方

日本では、学校教育の中で保健・体育という教科の中でスポーツと関わっている。また学校の行事として運動会や体育祭が、地域に開かれた催しものとしてある。それだけではなく、スポーツ少年団など社会体育の現場として生涯スポーツのフィールドがある。そこで、ドイツのスポーツのあり方やどのような教育的意義があるのかを現場の声から学び、自分自身の肌で感じたいと考えた。

②地域との連携と地域活性化をはかるための還元法について

ドイツのスポーツクラブの歴史は200年以上の歴史があり、社会全体に対しても公共の福祉を促進するという「社会公益性」を有していると私は考える。その根拠として、ドイツのスポーツクラブは公共の福祉を担う他の関連機関とも多様な協力関係を結んでおり、小学校とスポーツクラブが連携し、子どもの運動能力の低下や肥満防止の施策を展開しているなどの事例が報告されているからだ。このようなスポーツクラブのあり方は、高齢化や地域ネットワークの希薄化が叫ばれている日本でも発揮する可能性があると思い、学びたいテーマに設定した。

2. 全体テーマ《オリンピック・パラリンピックムーブメントについて》の考察

2-1. ドイツオリンピックアカデミー レクチャーより

ドイツオリンピックアカデミーは、オリンピックの価値や意義を発信することを目的として活動を行っている。ドイツオリンピックスポーツ連盟（DOSB）を中心に各加盟団体や教育現場と連携を取り、選手育成だけではなく、平和教育や青少年の健全育成にも尽力を注いでいる。具体的な活動としては、政治や経済界の代表や多種多様な分野の専門家が、スポーツのあり方や政策について話し合うビーブリッヒ会談などを主催し、スポーツの未来やオリンピックのあり方について大きな視点で捉える活動を行っている。また、小学生から学生を対象とし、IOC創設記念日（6月23日）にオリンピックデーとしてマラソンなどのイベントの企画にも携わっている。さらに、独自の教材を作成し、学校教育の中でオリンピック教育を実施していることが大きな特徴だ。

各国のナショナリズムの主張に伴い、敵対心や対立が生まれてしまう世の中をみて、フランスの教育者であるピエール・ド・クーベルタンが、スポーツを通じて世界平和を目指したことが、近代オリンピックのはじまりと言われている。クーベルタンの教育的な基本理念はオリンピックの理念として意志が生き続けている。以下の5つが理念である。

- ①身体と精神の調和…人格形成と鍛えられた身体が揃って、完全であるという考え方
- ②自分をパーフェクトに仕上げる努力…自身に焦点を当てることに専念する事の重要性
- ③アマチュアの理想…スポーツが好き・楽しさ > ビジネス的な考え方
- ④倫理原則…平和的を維持するために、開かれた考え方・行動でなければいけない
- ⑤スポーツの平和理念…フェアな立場を守り、スポーツを通じて心を通わすことの重要性

今回学んだ事として、オリンピック教育に関して一部の学校や地域だけではなく、全国的に普及されており国民に浸透しているところにドイツ独自の価値があると実感した。教育資料としては、夏季と冬季の開催前に2年ごとにテーマが変えられ、授業教材として活用出来るように出版社の協力のもと、教育カリキュラムに導入されている。また、オリンピックの意義はもちろんの事、開催国の文化や地域性にも触れ、国際理解を深める仕掛けがある。一つの科目としてではなく、科目という枠組みを超えて全体として伝えようとしている意向は、2020年の東京オリンピックまでに参考にしなければいけない事だと私は考える。また、世界的祭典の意義や歴史に関して、問題意識はドイツに比べて日本は乏しい。開催国であるならば、築き上げてきた歴史あるオリンピックの本質を理解しなければ国際社会の一員として恥ずべきことだと考える。

オリンピック参加国として、次回の東京オリンピックに期待することもレクチャーの中で学んだ。それは、スポーツの信頼性とオリンピックの開催の仕方についてだ。オリンピックには、様々なリスクもある。今までの歴史の中では、戦争に翻弄された大会や政治利用された事もあった。その中で、オリンピックは中立的な立場を取らなければいけないことを忘れてはいけない。また、メディア・ネットワーク革命が巻き起こる中で新たな問題の対策も考

えなければならない。ソーシャルメディアを上手く活用し、本質を守りながら新たな時代を構築しなければいけない使命が私たちにはある。自国の文化・特色を生かし世界に日本という国をプレゼンテーションするという面とオリンピックの重みと責任を果たすという双方の視点を大切にしなければいけない。

2-2. ドイツ障がい者スポーツ連盟・パラリンピックレクチャーより

今回のレクチャーでは、ドイツ障がい者スポーツ連盟の活動・ドイツ障がい者ユージュントの活動を学んだ。また、ドイツにおける障がい者スポーツの歴史的背景を踏まえながら、今後の展望に関して議論することが出来た。

パラリンピックのはじまりは、ドイツの神経学者で医師のルートヴィヒ・グットマンが麻痺によって車いす生活を送っている人の治療に、スポーツが良い効果を与えることを発見したことが原点とされている。それから、1948年にストック・マンデビル大会がアーチェリー競技会として開催された。当初は、参加者が男性14名、女性2名という小規模の障がい者向けの競技大会であった。ストック・マンデビル大会以降、世界的に注目され別の種目も取り入れられ、オリンピックと同時に開催されるようになった。1954年には、ドイツ人が初めて参加した。当時の主な参加者は、戦争で負傷した兵士が多かったようだ。

ドイツの障がい者スポーツを知る上で、忘れていけないことは第二次世界大戦の影響である。戦争によって負傷した兵士たちの医療的リハビリの意味合いとしてスポーツがあった。それは同時に、生まれつき障がいを持った人にとっては、スポーツをしたくても出来ない環境を作ったことになる。なぜなら、ナチスの影響が強く、障がい者に対して差別意識を持つ人が、戦後もいたことがあげられる。

しかし、歴史が移り変わる中で“インクルージョン”の重要性や過去の過ちを繰り返してはいけないという意識に変わり、社会的に弱い立場に押しやられていた人々も平等に人権が保障されるようになった。障がい者スポーツ界でも、しっかりとした組織が結成され、誰もがスポーツを楽しむことが出来る環境づくりに尽力している。

障がい者スポーツユージュントの目的に、健常者との交流や共同のスポーツ大会を通じて、自主的で平等な参加（インクルージョン）に貢献するというものがある。今回のパラリンピックムーブメントのキーポイントになることだと私は感じた。

障がい者だけに着目するだけではなく、全体として見ていく視点が大切である。どのようにすれば、全体が円滑に回るかを考えることは、施設や設備のバリアフリーだけではなく、心理的な快適さを考える上で重要なことであり、パラリンピックをきっかけに日本も考え続けなくてはいけない問題だと考える。それは、少子高齢化が進む日本にとっても必ず意義があることだと考える。

3. 日本団として掲げたテーマについての考察

3-1. インクルージョンについて

インクルージョンとは、すべての人の参加を可能にし、障がいや不利な条件等も含めた多様性をチャンスと捉えるプロセスである。また、スポーツにおけるインクルージョンでは両者が互いを尊重し寛容的に接するのみならず、スポーツにおける様々な共同活動と日常での共同生活を促進すべきとドイツスポーツユーゲントは提言している。

ナチスの考えや過去の意向の脱却というものが、原点として根強く、国として取り組んでいる事が今回の研修で学べた。職業訓練施設や障がい者と健常者の共同住居の訪問を通して、お互いにとって Win-Win の関係になるように制度面での工夫があった。

- ①充実した社会保障…ex) 職業訓練所の入居や授業料は国が負担している事や介助にあたる支援者への家賃免除など
- ②開放的なスポーツ施設…障がい者のみの利用ではなく、地域住民にも開放されており
区別するような意識ではなくコミュニティ形成が可能である
- ③誰もが参加できるスポーツイベント…知的障がい、身体障がい関わらず、誰しもの参加できる
イベントが自治体や団体によって開催されている

3-2. 複数競技に触れられる機会作り

地域のスポーツクラブはもちろん、学校と連携をしてスポーツバッチテストを実施し、人材を発掘する機会に生かしたり、普段は触れられないスポーツを知ってもらう目的で自治体などと協力してイベントを開催したりしている。また、職業訓練所の施設や市の施設に行政が予算を出し、オリンピック強化拠点として定めることや地域スポーツを支援する体制が整っていた。

ズバ抜けて優秀な人材に関しては、全国から強化拠点に集め、エリートを育成する設備も整っている。そこでは、選手のキャリアサポートも同時に行っていて、就職サポートや生き方までもアドバイザーとして支援している。

4. 私自身が設定したテーマについての考察

4-1. 教育現場でのスポーツのあり方について

今回の研修の中でザンドヴァイヤー基礎学校（小学校）に訪問した際に体育の授業を見学し、実際に子どもたちを対象にした授業を行った。ドイツは、2年ほど前から日本で言う特別支援学校を廃止し、障がいのある子どもたちも通常学級で学校生活を送っている。インクルージョンを意識しての国家プロジェクトだが、現場では新たな課題が出てきているのが現状である。例えば、バリアフリーの問題でトイレのスペースや机などの備品がまだ不十分であることや介助者の雇用形態の問題などがある。中でも現場の先生が口にしていたことは、カリキュラムや指導案が確立されていないことである。現段階では、学校単位で方針が決められており、授業に関しては教師自身が模索して決めている。そのような状況の中で、体育の授業を見学した。

クラスには、知的障がいのある子どもや半身麻痺の子ども、そして車いすの子どもがいた。その中でも子どもたちは、助け合う事や対等に接することを自然と行っていて、スポーツをするにしても全員で盛り上がり、個々に応じた戦略を主体的に考えていたことに驚いた。私は、そこにスポーツの意義を感じた。

大人が思うより、遥かに子どもたちは自然に状況を受け入れている。その中で、誰しものが楽しめるように工夫したルールを作るのは、教師ではなく子どもたちだと考える。それを見守り、支え、間接的にスポーツの楽しさを伝える事が出来れば、教育現場でのスポーツを行う価値は出てくるのではないか。

4-2. 地域との連携と地域活性化をはかるための還元法について

地域との連携を図るために必要なことは、お互いにとってプラスになること。すなわち、相互のニーズに合った方略をともに練ることにある。それは、まず地域性を理解しなければいけないと研修を通じて感じたことだ。例えば、大きな大学がある街であればそこを中心に捉え、地域の方に開放したり、様々なイベントを開催することがプランニング出来る。しかし、それは大学にとって何らかのプラスにならないと長期的に継続されない。だからこそ、学生にとって何が有益で求められているのかを考え、地域の住民やスポーツ団体がどのような面で貢献出来るかを考えていかなければいけない。そのことを、ヘルマン・ノイベルガー・スポーツシュレのイベントで感じる事が出来た。

還元法は、一方向からの還元ではいけない。必ず、相互に矢印が向く還元法を日本の単位団でそれぞれ考えなければいけないと感じた。

5. おわりに

今回、日本団の一員としてドイツに研修に行く事が出来て、とても幸せを感じています。日本スポーツ協会ならびに千葉県体育協会の関係者の皆さまに心から御礼申し上げます。そして、日本団の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

私の使命としては、これからの日本のスポーツを考え続けることと次世代の指導者を育成していく事だと思います。ただ、研修に行って、スポーツを楽しむだけでは価値が生まれません。それを誰かに伝え、行動で見せることが伝承になるのだと思っております。少子高齢化やオリンピック後の経済について社会問題として注目されていますが、まずは目の前の子ども達を育成し、地域を活性化させていく事が私に出来ることだと思います。

2018年日独青少年指導者セミナーに参加して

長野県 原島翠

はじめに、私は2004年に団員として日独スポーツ少年団同時交流に参加し、今回は指導者として日独青少年指導者セミナーに参加させていただいた事に感謝申し上げます。

今回の指導者セミナーの研修共通テーマは、東京開催の2020年東京オリンピック・パラリンピックを見据えた『Road to Tokyo 2020 -オリンピック・パラリンピックムーブメント』でした。

この共通テーマを元に事前研修会では『開催国としてオリンピック・パラリンピック後の更なるスポーツ普及を目標とした総合型スポーツとスポーツ少年団のあり方』を日本団の学びたいテーマとして決定し、2週間のセミナーに参加しました。

私個人でも知りたい事がいくつかあり、それについてもプログラムに盛り込んでいただき、とても充実した研修ができたと思います。ここでは、今回の研修で学んだ内容と学んだことを今後の活動でどのように活用できるか私なりの考えを紹介したいと思います。

【 レクチャー 1：ドイツスポーツユエグントについて 】

ドイツに着いて1番最初のレクチャーはドイツスポーツユエグント組織の説明でした。私たちはお互いの理解を深めコミュニケーションをとりやすくする為に、派遣団メンバーの自己紹介パワーポイントを活用し、まず自己紹介を行ってからレクチャーが始まりました。

講師は Hans Jürgen Burkhardt 氏

彼は私たちの自己紹介を聞き、私たちが何を学びたいのかを理解してくださり、急遽ドイツスポーツユエグントの説明にインクルージョンに関する説明も加えて下さいました。

ドイツスポーツユエグントは日本スポーツ少年団のお手本モデルになった組織です。

ドイツスポーツユエグントがスポーツを通して目指している青少年育成について以下の6つがあげられました。



- ・ 人格形成の支援
- ・ 自分で責任を持って行動するよう育成
- ・ 社会的共同責任と社会参加を促進
- ・ 統合能力の向上
- ・ 異文化学習紹介
- ・ 人間同志の共生における民主的行動様式、寛容、フェアプレー精神に対する理解を深める

私が現在指導しているスポーツ少年団の単位団に入ったのは小学1年生でした。

今思えばスポーツ少年団に登録参加しながらスポーツを通して多くの事を教えてもらっていたのだと感じました。ドイツスポーツユエグントがあげた6つの中にあることは、子どもの時に多くの仲間や多くの大人（指導者）と一生懸命一緒にスポーツをする事で、子どもはスポーツを通し成長するのだと考えます。成長する時にいかに私たち指導者が子どもに合った指導であったり、コミュニケーションをとる事はとても



大切だと考えます。

このスポーツを通して成長すると言う事は、大人にも言えると思います。

仕事や人間関係で息詰まってしまった時などに、仲間とカラダを動かす事で“もう一度頑張ってみよう！やってみよう！”とポジティブになった時、それは成長したことになるのではないのでしょうか。

インクルージョンについてですが、ドイツでは2年前に法律で障がいのある子どもも、健常な子どもと同じ教室で勉強することが義務付けられました。ドイツスポーツユエグントでは、障がいのある子どもを受け入れる準備が出来ており、子どもは障がいがあっても無くても、同じ子どもであることに違いはありません。遊びを通して体を動かし成長することが大切であり、全ての子どもの権利であると考えています。そこで、ドイツスポーツユエグントでは、インクルージョンのイベントを企画したり、企画されたイベントに対して助成金を出したりしています。

インクルージョンは、競技としてみると問題がまだまだ山積みなのは日本もドイツも同じ。

なので、まず子どものうちから健常な子どもと障がいのある子ども、お互いに参加できるスポーツイベントを企画し、スポーツを通してお互いを理解し助け合うことを学ぶことが大切ではないか、と私も同じく思いました。私たちもお互いに理解し合える場をつくる努力をしたいと思います。

【 レクチャー2：オリンピックムーブメント・オリンピック教育 】

ドイツでは、国民にオリンピックを身近に感じてもらう為・オリンピックの価値を知ってもらう為に多くのオリンピックに関するイベントを企画し開催していました。

ドイツオリンピックアカデミーが主に企画運営しているイベントとして、オリンピックデーやドイツスポーツフェアプレー賞授与、ドイツのオリンピックメダリスト獲得者再会会談など多くのイベントが行われており、オリンピックデーは約3,000人もの子どもたちが参加するピックイベントだそうです。

また、オリンピック開催に合わせて4年ごとにユースキャンプを開催し、内容としては青少年約50人をオリンピック開催国に派遣し、肌身でオリンピックを感じ自国選手の応援やオリンピックスポーツへの理解を深める研修イベントとなっているそうです。

このようなイベントの他に、ドイツオリンピックアカデミーでは学校の授業用に教育資料をオンラインで提供したり、本を出版したりしています。

先生たちは、このアカデミーが提供している教育資料や発行されている本を使用したり、インターネットやその他の教育材料を使い授業を行なっていると言うことです。

日本の義務教育には、オリンピックについての詳しい教育は無いので、日本でも義務教育の授業内容に取り入れたり、スポーツ少年団のジュニアリーダースクールの講義内容に少しずつ取り入れ、オリンピックを身近に感じる事が大切だと思いました。

今後、私がスポーツ少年団の行事で子どもたちの講義の担当になった場合には、講義内容に取り入れたいと考えています。



ドイツの小学校では、オリンピックウィークがあり、約1週間オリンピックに関する専門的な授業を行います。

〈授業内容〉

- ・オリンピックアカデミーが発行している教材を使って調べ学習
- ・オリンピックに関係する事・物を作成（アートの授業）
- ・特別外部講師に来てもらいオリンピック競技体験会
- ・ミニミニオリンピック開催（オリンピックに似せた運動会）

私は今回の研修で、オリンピックウィークを知り、日本でも似たようなイベントができないものかと考えました。日本では、ドイツのように義務教育の教育指導内容に盛り込むのはなかなか難しいと思ったので、スポーツ少年団のイベント内容に取り入れるのが、最短で実行できると考えました。

まずは、来年のジュニアリーダーズスクールで実行できるか、内容など詳しく考えたいと思います。



*オリンピックウィークの日程表



*調べ学習などで使用するテキスト

レクチャーの内容が前後してしまいましたが、私がこの研修で学びたかった、オリンピック・パラリンピックと環境政策についてレクチャーの中で説明があり学ぶことができました。

やはり、オリンピック・パラリンピックを開催するにあたり、どの開催国も環境政策について議論となっているそうです。ドイツでもミュンヘン冬季オリンピック開催国立候補の時点で、住民投票になったと説明がありました。この時の住民投票では、「オリンピック・パラリンピックを開催する為だけに、森林を切り開いたり、お金をかけて建物を建設するのはどうなのか？」と開催地域の住民から声が上がリ、その結果ミュンヘンに住んでいる人々の住民投票を行ったそうです。これからの開催国は環境に配慮したハイブリットなオリンピック・パラリンピックが求められていくと私もより一層思いました。

【 地方プログラムについて 】

地方プログラム① 滞在地：Saarbrücken

見学施設・参加プログラム

- ・Hermann Neuberger Sportschule と Olympiastützpunkt 見学
- ・スポーツ予防医学研究所ランニングマシーン体験
- ・インクルージョンスポーツイベント“スポーツデー”参加
- ・パラリンピック・ボッチャの選手との意見交換
- ・共同生活・学習支援団体のインクルージョン共同住居訪問
- ・ホンブルクススポーツセンター訪問見学
- ・ホンブルクキリスト教社会教育施設（職業訓練校）見学



地方プログラム② 滞在地：Sinzheim（ホームステイ）

- ・ジンツハイム市長表敬訪問&記念植樹
- ・保養施設カラカラ浴場見学
- ・ザンドヴァイヤー基礎学校（小学校）訪問
- ・障がい者スポーツ連盟
パラリンピックスポーツ助成金担当者との意見交換
- ・ジンツハイム柔道クラブトレーニング見学
- ・フライブルクオリンピック強化拠点センター見学



地方プログラムでは、見学させていただいた施設の担当者や関係者の方々からいろいろな説明などがあり、細かいところまでお話を聞くことができたり、お互いに多くの意見交換が出来たと思います。そして、今回の共通テーマがオリンピック・パラリンピックなのでテーマに関係する施設などの見学が多く、なかなか見ることの出来ないトレーニング器具なども見る事が出来ました。

地方プログラム②のSinzheimではスポーツユエグントの単位団の方々と意見交換したりして友好関係を築くことができ、気兼ね無く話しをすることが出来ました。

【 ドイツのインクルージョンに対するの考え 】

レクチャー①でも書きましたが、ドイツには現在法律で障がいのある子どもも同じクラスで教育を受けることになっています。障がいのレベルによっては、イレギュラーなこともあるそうですが、基本的には皆同じ教室で勉強します。

私たちは、今回地方プログラムの中でザンドヴァイヤー基礎学校（小学校）を訪問し、自分たちの目でインクルージョンのクラスを見てきました。

インクルージョンのクラスには、何処にでもある椅子と机の組み合わせと特殊な机、机は同じでも特別な椅子と言った3つのパターンがまず目に入りました。

先生の説明では、私たちが見学したクラスには車イスの子どもと脳に障がいのある子どもがおり、健常な子どもたちと一緒に学んでいて、特別な机や椅子は障がいのある子どもでも教室で快適かつ、皆と同じように過ごせる為のアイテムの一つだそうです。教室の入り口は車イスでもスムーズに出入り出来るようにバリアフリーになっていました。この学校では一度にバリアフリーに改装することが難しいので徐々に行っていました。



インクルージョンクラスは、授業をする先生の他に子どもたちをサポートする専門の先生が加わり授業を行なっています。

次に、見せてもらったクラスの子どもたちと体育の授業を行いました。インクルージョンのクラスでは、ベースとなる授業内容があり、それに対してみんなで出来るようにする為の手段や時間の使い方などを子どもたち自身が考え、授業を組み立てていました。



体育の授業内では先生から障がいのある子どもへの手助けは無く、子どもたち同士で助け合いながら授業が進行していました。車イスの子ども、自分が出来る範囲内で物を運んだりしながら、みんなと一緒に授業を受けていました。



現在、ドイツでは小さい頃から子どもたちにインクルージョン教育をしていけば、お互いを助け合うことが当たり前になり、皆平等になるのではないかと考えています。

現在の日本ではまだまだ、偏見の目が強く今後どこまでドイツに近づけるか分かりませんが、私たち指導者はスポーツを手段として皆平等を率先して目指して行かなければいけないと私も思いました。

【インクルージョンスポーツイベント スポーツデー に参加して】

今回私たちが参加させてもらったイベントの主催者が Saarländische Sportjugend と言うことで、私たちはこのイベントをお手本として、日本でインクルージョンスポーツイベントをどのように企画・運営していけば良いのか、自分たちの目で見て体験することで多くのことを学びました。

・参考になったポイント

- ① どんな人でも楽しめる体験会スタイル
- ② 多くのスポーツに参加してもらう為にスタンプラリースタイルを採用
- ③ 障がいのある人の気持ちを理解してもらう為の疑似体験ブース
- ④ ワークショップブース（スポーツ以外の楽しみもプラスアルファ）

・日本で開催する時の問題点

- ① スポーツイベントの告知や広告方法（Facebook など SNS を使うか？）
- ② 障がい者の方も安心して参加してもらう為には、何人ヘルパーが必要なのか
- ③ 障がいのある子にも多く参加してもらう為にはどうしたらいいか など



最初はこのイベントをお手本に手探りになると思いますが、日本でもイベントを開催出来るように考えたいと思いました。

私自身、今回のスポーツデーに参加して、初めて体験したスポーツもありました。子どもたちと一緒にスポーツを行うことで新たな経験や新たな発見など、子どもたちも私たち日本団メンバーもみんな笑顔でした。

スポーツは言葉が通じなくても、国が違っても共に楽しむことで皆笑顔になり仲良くなる魔法のコミュニケーションツールだと、私は確信しました。



【開催国日本 東京オリンピック・パラリンピックに求められること】

私たちは今回研修の中で、パラリンピックの選手に会い、意見交換することが出来ました。

彼はボッチャの選手で日本を訪れたことがあると私たちに話しをしてくれました。

日本を訪れた際に宿泊施設を探すのにとても苦労し、ホテルなどには宿泊出来ず、代わりにデーサービスの施設を借りて日本で滞在されたということでした。

徐々にホテルもバリアフリーになりつつありますが、まだまだ少なく車イスの人がトイレに入るだけのスペースが無かったり、エレベーターが狭かったりと多くの問題があるということでした。

日本語の大は小を兼ねるではないですが、パラリンピックを多くの人が見にこれるようにバリアフリーをメインに競技会場建設や近隣宿泊施設建設をすることで健常な人も障がいのある人もみんなが観戦出来るよ

うにすることが求められることであり、そこにお互いがお互いを思い理解する人々の気持ちがあって助け合いながらオリンピック・パラリンピックを盛り上げ大会成功に繋がるのではないかと思います。

文中にも書きましたが、スポーツは言葉が通じなくても、国が違ってもどんな人であっても共に楽しむことができ、皆笑顔になり仲良くなる魔法のコミュニケーションツールだと私は考えます。

【 おわりに 】

今回私はこの研修とスポーツを通し新たな多くの仲間や友人に出会うことができました。今回のこの絆は一生途切れることは無いものだと思います。

2週間一緒に行動してくださいました、日本団メンバーの皆さん・通訳の知世さん 受け入れ事務局の皆さんと地方プログラム受け入れ担当者の皆さん、そして Sinzheim 柔道クラブの皆さん・ホストファミリーの皆さん、各見学施設の方々に心より感謝致します。

今後もスポーツ少年団の指導者として、スポーツを通してスポーツの多くの可能性や素晴らしさを子どもたちと共に学び共感し世界の仲間と助け合いコミュニケーションを取りながら成長できたらと思います。

最後に世界の仲間が東京オリンピック・パラリンピックを楽しみにしていますので、スポーツ少年団を通し2020 東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げていくお手伝いできればと思います。





2018年日独青少年指導者セミナーに参加して

石川県 西田 勉

<はじめに>

私がこのセミナーに参加しようと思ったのは、5年前に娘を日独同時交流でドイツに送り出した時にいつか自分もドイツに行きたいと強く思うようになったためです。また、今年の夏に同時交流の受け入れをした時にうちにホームステイした若い指導者が、5年前娘が訪独した際一緒に活動していたことや、今回受け入れをしてくれたジンツハイムの隣町であったことなど、とても因縁を感じていました。

今回のセミナーの共通テーマは「Road to Tokyo 2020ーオリンピック・パラリンピックムーブメント」でした。私は普段スポーツ少年団で水泳を指導していて、オリンピックやパラリンピックといっても、テレビ観戦するだけで身近なテーマとして捉えることは少し難しいと感じていました。そんな不安や期待を持ちながら、初めてのドイツへと旅立ちました。

<座学や訪問を通して学んだこと>

○ドイツスポーツユエゲントについて

ドイツのスポーツ組織はドイツスポーツ連盟(DOSB)を頂点として16の州スポーツ連盟、62の種目別競技団体、20の特別な関連を持ったスポーツ団体から組織され、その下に9万を超えるスポーツクラブが加盟している。

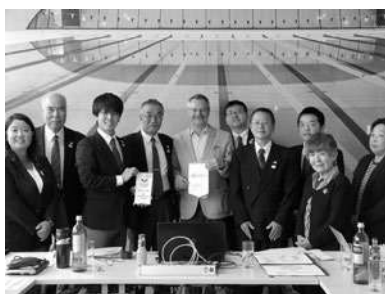
ドイツスポーツユエゲント(dsj)は、DOSBの内部組織であり、その下に州組織、市町村組織とあり、大体日本のスポーツ少年団と同じ構造を呈している。

その底辺のスポーツクラブの6歳から23歳までの会員がdsjに会員登録されるといった形だ。

日本のスポーツ少年団も組織は基本的に似ているものの、活動は小学生が中心で、中学高校で部活動に入ると卒団と称して分断される形になっており、生涯スポーツとしてのスポーツの継続が阻害されていることがわかる。

一方で、ドイツのスポーツクラブは全て総合型からなると思っていたのだが、日本と同じ単一種目のスポーツクラブがほとんどであるようだ。

そして、会員の多くは自分がdsjの会員でありながら、その活動についてあまり理解していないことがわかった。これは、日本のスポーツ少年団でも同じで日々のスポーツをやっているにもかかわらずその上位組織の活動にあまり関心がないという実態と似ていると感じた。



○オリンピックムーブメントとオリンピック教育について

ドイツオリンピックアカデミーという組織があり、その目的は青少年にオリンピックの魅力や価値を紹介するということだ。

オリンピックデー、フェアプレイ賞授与、国際会議やジュニア選手強化を目的としたオリンピックユースキャンプなどを行っている。また、オリンピックやパラリンピックについての教材やワークシートを作成しているとのことだった。そこにはオリンピックの歴史や理念はもちろん、開催国や競技が行われる都市の情報、内外の注目選手の情報といったあらゆる情報が網羅されており、年々ページ数が増えているとのことだった。

そのテキストは学校の授業、体育はもちろん国語、外国語、社会、図工、音楽といったあらゆる教科に使用されるそうだ。近年はそのデータを web からダウンロードできるようにしており、誰でも閲覧できるようになっているとのことだ。

また、オリンピックプロジェクトウィークというものがあり、授業や課外活動として、オリンピックについて学校や地域で行われるということだ。

日本では、オリンピックを題材として、そこまでできるかと考えると甚だ疑問ではあるが、オリンピックの理念を子ども達に伝えることは指導者として有意義なことだと感じた。

○パラリンピックムーブメントについて

パラリンピックは、ドイツの医師ルートヴィヒ・グットマンが麻痺で車いすに座る人にスポーツが良い効果を与えるということで始めた第1回ストック・マンデビル大会が初めとされる。最初はアーチェリー競技だけだったが、別の競技も取り入れられるようになって、オリンピックと同時に開催されるようになったものである。

ドイツの障がい者スポーツ組織は、ドイツ障がい者スポーツ連盟を頂点として、17の障がい者スポーツ連盟（州レベル）、8,300の障がい者スポーツクラブ（市町村レベル）からなり、約58万人のクラブ会員がいる。また、2つの専門団体として、ドイツ車椅子スポーツクラブとドイツ・デフ（難聴）スポーツクラブがあるそうだ。

そして、ドイツ障がい者スポーツユーゲント（DBSJ）には、約34,000人の26歳以下の障がいを持つ子どもや青少年が会員になっているということだ。

DBSJの活動は、パラリンピックに向けたトレーニングや連邦ユーゲントシュピール（運動会）や障がいのある子どものためのバッチテストなどがあり、またスポーツを始めるきっかけとなるタレント・デー（州レベル）や、体験レッスン（連邦レベル）という毎年5つくらいの競技を対象に国内からスポーツの秀でた子を対象にしたものもある。

近年は学校のインクルーシブ教育において障がい者のある子ども達が普通学級に入っている場合があり、本人の能力に気づかず、タレント発掘がしにくいという状況もあるとのことだった。

○オリンピック・パラリンピック選手育成について

ドイツでは市単位に、競技ごとのチャンピオンチームで選手の育成を行っている。また、各州ごとにオリンピックの強化拠点がある。

その強化拠点の施設は大抵大学等の教育機関と連携し、選手は宿泊施設で生活しながら、学業とスポーツを両立させていた。

今回訪れたザールブリュッケンのヘルマン・ノイベルガー・スポーツシューレでは、トライアスロンを中心とした強化拠点で、大学にはスポーツ施設以外にスポーツ医学の研究機関が置かれており、選

手たちのデータを集めて研究したり、選手がスポーツ経済学などを学べるようになっている。それは選手生活を終えたときに第2の人生を見つける手段とするためである。

また、フライブルクの強化拠点は、パラリンピックの選手用に、大きなベルトコンベアで出来たランニングマシンでの練習が可能にしていた。

オリンピックやパラリンピックの強化種目の選手に選ばれると補助金も出て生活費としてあてがわれる。しかし、オリンピック競技から外れると補助も打ち切られるというのも現実としてあるとのことだった。



(ヘルマン・ノイベルガー・スポーツシュレ)



(フライブルクの強化拠点)

<インクルージョンについて>

インクルージョンという言葉は近年盛んに聞く言葉であるが、意味は人種、民族、性別、年齢など、多種多様な人材を活かす手法である。

dsjではインクルージョンを、全ての人の参加を可能にし、障がいや不利な条件等も含めた多様性をチャンスととらえるプロセスと理解し、スポーツにおけるインクルージョンではすべての人が互いを尊重し寛容的に接するのみならず、スポーツにおける様々な共同活動と日常での共同生活を促進すべきであると捉えているとのことだ。

インクルージョンが盛んにいわれるきっかけとなったのは、国連・障がい者権利条約に基づくところが大きく、国レベルで批准・発効されると行政・教育・スポーツ・企業などあらゆるところで取り組みがなされ始めた。

今回のセミナーでは、いくつかのインクルージョンに関する訪問や体験もあった。

○小学校におけるインクルージョン

障がいのある子どものいるザンドヴァイヤー基礎学校を訪問した。校長先生から取り組みについての説明を受けた後、教室の見学と体育の授業を参観させていただいた。

取り組み自体はまだ浅く、バリアフリー化はまだ進んでいないようだが、人的努力によってカバーしているとのことだ。

教室の椅子は日本のそれと違い、標準で3段階に高さ調整できるものであった。そして、障がい者用のものは無段階に高さが調整できるものであった。日本で導入されているかわからないがよく考えられていると思った。

体育の授業では健常者と障がいのある子が一緒にできるカリキュラムがよく工夫されていた。

今回の学校の取り組みはモデルケースのようで、日本とそんなに変わらないように受けた。



○CJD ホンブルクの見学

ここは、就労に支援が必要な人が州のハローワークで認められた時に、就労に必要な技術を習得するための施設でした。木工や園芸、パソコンを使った技術の習得、スポーツジムやプールでスポーツ指導者の技術も学べるということだ。

また、スポーツジムやプールなどは外部の人にも会員制で開放しているということだった。



○2つのチャンス

ザールブリュッケンの団体が主催する2つのチャンスというイベントを見学した。

この団体は障がいのある人や、人生で挫折した人にもう一度チャンスがあるということで音楽を勉強するための支援を行い、発表の場を作っていた。

スポーツとは違うが、色んな方面でのインクルージョンがあることを体験することができた。



○障がい者のためのグループホーム見学

ここは、障がい者が就労を目的に自立を目指して共同生活をする場所だった。ここでは、健常者のボランティアも共同で生活し、支援が必要な部分をお手伝いしているというものだった。現在共同生活をしているという大学生の話聞くことができた。

彼らは直接介護などをするわけではないが、食事の世話など必要に応じてお手伝いをし、その代わり部屋代が安く確保できるメリットがある。

知人の障がい者の就労施設の代表者に話をしたところ、日本にも障がいのある人の自立を支援するグループホームはあるが、入居の条件が障がい者だけとなっているが、施設がいつも障がい者でうまるとは限らず、空きがある場合もあり、健常者のボラ



ンティアが入ることも可能かもしれないということだった。

しかし、資格の問題やその人の適性も考慮するなどの課題もあるように感じた。

○インクルージョン・スポーツデー

ザールランドのスポーツユーゲントが主催する“あなたと私一緒に!?”というイベントに参加した。

場所はヘルマン・ノイベルガー・スポーツシュレの施設の中で、車椅子の体験、工作やゲーム、ボクシング、卓球、クライミング、バランスボールを使った運動等 20 種類ほど用意しており、スタンプラリー形式で廻るものでした。外にはポテトスープとパンで軽いランチができ一日過ごせるような企画だった。

参加者に何人かの障がいのある子どももいたようだったが、少ないのが悩みでもあるようだ。

運営は競技の関係者やボランティアでされており、若い学生の手伝いも沢山いた。

スポーツ少年団でもこのような企画は積極的に取り入れられると良いと思った。



<ホームステイの受け入れ>

今回のセミナーでは4泊のホームステイがあり、受け入れをしてくれたのがジンツハイムの柔道クラブだった。この柔道クラブは単一のスポーツクラブで、子どもから大人までが習っていた。

ドイツでは日本の武道がとても盛んなようで、柔道を始め、剣道や合気道などのクラブも各所に多くみられた。

日本を発つ前にホストファミリーへのお土産を持参することになっていたが、その家庭の情報がなかなか入らず実際に届いたのが3、4日前だった。後で聞くと夏季休暇と相まってホストファミリーがなかなか決まらなかったらしい。受け入れに関して自分もかなり大変な思いをしたので察するところもあった。

それでも、到着時の歓迎はとても暖かく素敵なものだった。サプライズで夏にホームステイをした指導者のティム君も駆けつけてくれた。そしていよいよホストファミリーとの対面です。お世話になったのはシュネーベレさんのお宅で、三重県の關さんと一緒だった。家族は若夫婦に赤ちゃん（ピア）とおばあちゃんだった。おばあちゃんは集合住宅の別の部屋で暮らしていて、今回通訳の知世さんがお世話になり、食事はみんな一緒に賑やかだった。

ホームステイ中はホストファミリーの方々が中心になって、訪問先や観光にと連れて行ってくれた。途中には水泳の練習を見たいという私のリクエストに応じてくれて、隣の市にあるプールでジュニアのトリアスロンの水泳練習や、競泳のチャンピオンチームの練習をしているところへ連れて行ってくれた。

ジンツハイムでは、市長表敬や受け入れの記念植樹まであり、木が大きくなったころ私の孫が訪れてくれたら嬉しいし、その前にピアちゃんが同時交流で日本に来ることを楽しみにしている。



(歓迎式での演奏)



(ティムとの再会)



(ホストファミリーと一緒に)

<まとめ>

今、日本では東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて盛り上がりを見せていますが、一過性のイベントとなることなく、ドイツのようにオリンピックの理念や精神を子ども達に伝えることが大事だなと痛感した。

また、インクルージョンについては、まず出来ることからという考えで、自分の身近なところで出来ること、又はそういったイベントへの参加を心がけていきたいと感じた。

前回の東京オリンピックのレガシーとしてスポーツ少年団が出来たように、今回のオリンピック・パラリンピックを契機に「みんなのスポーツ」を広めるために、今後総合型スポーツクラブが発展していくことが必要だと思う。また、スポーツ少年団との連携がカギになっていくのではないかと思う。

スポーツ少年団の日独同時交流の参加団員が減少していることから、この経験を活かし、国際交流の必要性や楽しさを伝え、地域に貢献していきたいと思う。

<おわりに>

今回初めて訪れて感じたドイツの魅力は、自然豊かでフランクフルトのような都会においてもゴミゴミとした感じがせず、幾多の戦火にまみれても古い建物も残しながら観光資源の多いところだ。

3ヶ国エックといわれる3つの国が交わるところがドイツにいくつかあり、今回はフランスとルクセンブルクが隣接するところに行きました。こういう経験は日本では絶対にできません。

唯一鉄道の時刻がいい加減なところがありますが、それをおおらかに許しているところがドイツ人らしいなと思いました。

最後に、2週間を共にした日本派遣団のメンバーと知世さん、dsjの宮下さん、古本さん、そして高橋さん、また、ドイツの関係者の方々に感謝を申し上げて、私の報告とさせていただきます。

静岡県：杉山 仁夫

(はじめに)

2020年にオリンピック・パラリンピックが日本で開催される。この機会にスポーツ少年団の活動としてどのように実践することが「オリンピックムーブメント」に繋がるものなのか。そのためにはどのような行動をしたらよいのか。いろいろと思い悩んでいた。

この疑問を解くヒントになると思い日独青少年指導者セミナーに応募した。幸い派遣団員の一人に選ばれ訪問する機会を得ることができた。年齢を考えると今後はこのような交流やセミナー等で、ドイツを訪問できるのは今回が最後になると思っている。従って、現地で「どんなこと」を学んでくるのか。帰国後その実現のために「なにをどのように」実践できるのか。課題の解決に向けた取り組みを計画的にすることが大切だと感じている。

帰国後、セミナーを活かした実践をするためには、共通テーマの「オリンピックムーブメント」と自己課題である「スポーツとインクルーシブ」の二つについてドイツで具体的場面を視察することが大切であると痛感している。

1. <ドイツ文化の理解として>

成田国際空港を出発、ドイツ行きの直行便は果てしなく広がるシベリアの上空を飛び続け、約12時間後ドイツの空の玄関フランクフルト空港に着いた。

○地形と気候について

ドイツは、ヨーロッパのほぼ中央部に位置している。国土はおおむね平坦地でスイス、オーストリアに接する地域をのぞいては、あまり高い山はない。森の大部分はブナの森である。

ドイツ人は秩序を重んじ、理論的で、勤勉で、几帳面であり、日本人の気質と似ている。ドイツの社会では、一人ひとりの権利や責任が強く意識されている。そして、社会のあらゆる仕組みが法律や規則にのっとって、効果的に運営されている。

ドイツのワイン地方では、日本のお茶畑のように斜面を利用してブドウ畑が広がっている。

今ではヨーロッパでの移動の際は、パスポート無しで国境をこえて行き来できる共存する社会になっている。

そういった国際社会を目指していくには、お互いに理解し合い、協力しあっていくことが大切である。

このようなことが社会の中におけるインクルージョンという考え方の基盤になっている。

2020年に向けて、スポーツを通して培うものとして、「世界の中の日本人」という自覚をして「ゆたか心」を育



成することである。特に、思いやりの心をもつことや様々な人々と協調しながら、自分の考えを堂々と主張できる人間を育成することが大切であると感じる。

○ドイツの鉄道

開通は日本の鉄道より約40年も早い。都市と都市の間はIC（都市間特急）やICE（都市間超特急）で結ばれている。ICEは日本の新幹線にあたり、最高速度280キロで走っている。ICやICEは独自の路線で走っているわけではない。従って、前の列車が遅れると直ぐに後続の列車が数十分の遅れになることが多い。

実際に、私たちの移動でも70分遅れの表示が出て、のプログラムに大きく遅れないように急遽、駅まで送ってくれた自家用車に再度分乗して目的地まで移動した。ヨーロッパは一つという実感として、国境を越えて隣国の都市と結ぶEC（ヨーロッパ国際特急）も走っている。国境を越えてもEUの列車内でパスポートを見せることはなかった。ヨーロッパは一つの経済として成っていると実感した。都市では、Sバーン（近郊電車）やUバーン（地下鉄）、それに路面電車が走っている。

公害が少なく、大量に人を運べるのが電車だという考えから、ドイツの各都市では、路面電車などの公共の乗り物が見直され、人々が電車や列車を積極的に利用している。

○道路について

道路については、世界にはこる高速自動車道路アウトバーンが有名である。全線信号無し、制限速度なし、通行料金もいない。他の道路もロータリー方式が多く信号機が少ない関係からか自動車の運行はスムーズにしているように感じた。

○船について

ドイツには、河川を利用した交通機関が発達している。大きな川では色々な国の旗が掲げられた客船や貨物船の行き来がみられる。

○ホストファミリーの家庭から見たドイツの住まいと緑にこだわるドイツの人について

ホームステイさせていただいたシュテファニー夫妻宅



の家の中や周辺はとてもきれいである。いつも家の中が
がきちんと掃除されている。ガラスの窓もよくみがかれ、
窓辺やバルコニーにはたいてい花が飾られている。
それだけではない。洗濯物を外に干さない（地下にボイ
ラー室のある家が多く、洗濯物はそこで乾かす）など、
まわりの美観にも気をくばっている。



住まいの色は、はでな原色は少ない。落ち着いた中間
色が好まれている。どうも、まわりの自然と調和する色
が選ばれているようである。

町では電線や電話線は地下に埋められ、道路ぎわはすっ
きりしている。とにかく、身近な緑を大切にしている。



○ 三国エック（川の合流地点）

ドイツ、フランス、ルクセンブルクの合流点がある。

この場所にはミニエッフェル塔や無人の図書ハウスがある。ここで偶然フランスの学校の子とルクセンブルクの学校の子ども達が交流している姿を見た。他国の学校が簡単に交流することは、日本では考えられない光景であった。

○ スポーツ関連について

ドイツでは、全ての競技団体がドイツオリンピックスポーツ連盟（DOSB）の傘の下にあり、巨大なピラミットの構造をしている。スポーツに携わる指導者は、そのような構造の中で指導者資格を取得する形になっているため、全ての指導者がDOSBに所属している。ドイツのように統一された組織のもとでライセンスを取得するメリットは大きく2つある。一つには、統一資格であるために、指導者のレベルという点で均等化が期待できる。ドイツのように資格保持者の質が高まり社会的信頼も上がれば、より活躍できる環境が整うのではないかと感じた。二つめとして、ドイツでは指導者のニーズに応じた指導環境が整備しやすい。組織のピラミッド構造の中で自分がかつとも適した位置で指導することができる。キャリアアップの道筋もはっきりと示されており、モチベーションを高く持ちながら指導に関われる環境がある。

2. <オリンピックムーブメントに関して>

日本スポーツ少年団には、3つの理念があり、この内容については既に皆様方は周知の通りであるのでここでは割愛する。

○ 「dsj」の青少年育成ガイドラインは以下の通りである。

- ・ 人格形成の支援
- ・ 自分で責任を持って行動するように育成
- ・ 社会的共同責任と社会参加を促進
- ・ 総合能力の向上



- ・異文化学習
- ・人間同士の共生における民主的行動様式
- ・寛容、フェアプレー精神に対する理解を深める以上であり、日独共に幼年期のスポーツと関わることを通して人間形成を大切にしている。



○ザールランド「ヘレムト・ラング」ザンドグアイアー基礎学校（1年～4年）でのオリンピック・パラリンピックムーブメントの関わる実践例

この実践は、州全部の学校が取り組んでいるわけではなく、各学校の裁量で自由に取り組んでいる。大事にしている内容は、オリンピックの歴史や開・閉会式の雰囲気、大会種目のミニ体験を通してスポーツに参加するなど、参加国や開催国の国についての特徴を知り、オリンピック・パラリンピックの体験を通して理解しようとしている。

具体的な実践は、大会2年ぐらい前から始まる。オリンピック旗の歴史や意味を考え、図工のような時間に自分たちでオリンピックマークを絵やタイルで作り飾る作業をする。また、出場する国の文化を調べて絵や言葉でまとめて発表する。開催国の国旗を作り旗を振りながら入場する。オリンピックデーを通して体験したことをそれぞれ個人のファイルに記入する。オリンピック種目にある指導者によるミニ体験ゲーム、テニス、アーチェリー、レスリング、ボクシング、ミニサッカー、陸上競技、体操など、色々なスポーツを体験してノートに記録する。そして、オリンピックデーの最終日には体験スポーツの成績発表をするばかりでなくオリンピックに関連した学習についての発表もする。子ども達自身で閉会式の入場を演出し、代表の子どもが閉会宣言をしてオリンピックデーの学習は終了する。このことにより、子ども達は、オリンピックの歴史や開催国の文化を理解するばかりでなく、オリンピックが身近な存在となる。

3. <インクルージョンの実践について>

ザンドグアイアの小学校訪問。学校長が対応してくれた。学校やスポーツ施設などの改善は、お金がかかることなので、施設の全てを一度にインクルージョンに対応できるような施設の新改築などすぐに対応できないのは日本と同じである。

視察した小学校では、4年生に足に障害のある子や脳性麻痺の子が一階に増築した教室と一緒に学習している。教室の中で、車椅子に対応できる机や椅子など、子どもの学習にとってよいと思う物は家庭の方で考えて設置する。体育で場所を移動する場合、本人が困ることが予想される時



には家庭で依頼したヘルパーが付きそっている。ヘルパーへの謝金は親の責任で行い学校側は関わらない。体育では、みんなが一緒に楽しめることができるための新しいルールを作り、障がいのある子どもも同じ活動ができるようにしている。周りの子も自然に助ける姿が見られた。

視察校では、このように心のバリアをなくし、だれもが同じ教室、同じ体育館で勉強できる工夫がされている。



○共同生活・学習支援団体のインクルージョン共同住居グループを訪問して

障がいのある人20～30歳の女性6人と健常者の23歳の大学生男女各1名と福祉団体が雇っている2人を含むアシスタントの計11人が共同生活している。

居住は、大きな三階の一戸建ての建物の2階を使っている。この施設は、古い建物をリフォームしている。エレベーターは設置してある。全員が個室で生活している。朝は6時に朝食、夕方は19時に食事を共にする。



管理人として同居している23歳の男性大学生に聞いてみた。「将来このような福祉の職業に関わるかは未定である。」なぜ、ここで生活するのか。「今は自分の住居を安く確保でき、手当ももらえるのでやりがいがある。」とのことであり、特に将来を見通して関わっているわけではないようである。双方に利点があるから関わりをもっている。



○「ザールブリュッケン」ヘルマン・ノイバアガー・スポーツシュレーでインクルージョン・スポーツデーに参加した。特に外部からの補助金は出ていない。会費として一人2ユーロの予算で運営している。外の広場では、健常者に対しては、車椅子体験、障がいのある子と一緒に、粘土細工や旗作りをし、昼食も食べることが出来る。体育館内では、様々な運動遊びを通して障がいのある人と一緒に活動する楽しさを発信しようとする活動である。この様な活動体験は小さな年齢からインクルージョンの意識を養うために大切であることを感じている。また、活動に対して障がいのある人と、それを支える指導者やボランティアの参加がなんとかなっているという共生社会への関心の高さが素晴らしいと感じた。

○グウルスハイムのハウス・ゾンネ公益有限会社訪問（支援が必要な人のための施設）

1平方キロメートルの中に施設がある。ゾンネとは、「村」の意味だそうである。

430人の障がい者と500人の職員で運営されている。障がいのある人の職業訓練をしている。若者の40人は敷地内の宿舎に泊まり職業訓練をしている。宿舎には社会教育学を学んだ人が一緒に住んでいる。宿舎外に住んでいる人が70人いる。また、別のグループホームに住んでいる人もいる。宿舎に住んでいる40人の若者には、国の労働省から住居の補助金が、一人2,500ユーロ出ている。

○ スペシャルオリンピック・ザールランド会長のマルガ・フルーアさんとの対談

色々な場所でリハビリやトレーニングをしてスポーツ活動をしている人は多くいる。特に選手登録をして活動しているわけではない。そのような状態なので多くの中からパラリンピックを目指す選手を探すのが難しいとのことである。



○ ザール州のホンブルグ柔道スポーツ少年団

ドイツ全土において青少年の柔道は人格形成のために良いスポーツであると人気である。お世話になった柔道スポーツ少年団の責任者は目の見えないご婦人であり、自らも柔道をしている。

周りの自然な関わり、ご婦人のサポートだけでなく、柔道スポーツ少年団クラブへの協力も惜しみなくしている。



<終わりに>

日本スポーツ協会の関係者の皆様、そして2週間を共に過ごした20才代から60才代の年齢幅のあるメンバーの皆様方、チームワークが最高でした。本当に有難うございました。

ドイツでお世話になった写真の三人は忘れられません。ドイツ語の分からない私たちのために日々ご尽力を賜り感謝しようがありません。とにかくドイツでは、私たちの気持ちを理解しながら一緒に行動をしてくださり心強かったです。色々お世話になりました。本当に心より感謝しています。有り難うございました。



本セミナーや交流は私たち指導者にとっては大変有り難い機会だと思います。指導者にとっては年齢に関係なく「指導と研修」は表裏一体切り離せないものです。日々新たな実践の中で疑問が生じた場合は解決策の一つとしてスポーツ先進国のドイツでの視察を通して確かめる機会があることは貴重なことだと感じています。皆様、興味・関心のある方は是非応募して外から日本を観て何かを感じてほしいと思います。

2018 年日独青少年指導者セミナーに参加して

共通テーマ Road to Tokyo 2020 - オリンピック・パラリンピックムーブメント

岐阜県 牛田 健造

今回のセミナーとは別になりますが、十数年前に日独同時交流の団員として、ドイツに派遣で行かせていただきました。もちろん内容だけでなく、当時とは年齢や立場も違ってしますので、今回のセミナーでは共通テーマの内容ももちろんですが、以前は聞くことができなかつたこと、体験できなかつたことなど多くのことを学べる機会と考えドイツに行かせていただきました。その時に感じたことなども含めて、文才がありませんが、書かせていただきます。

今回は、オリンピック・パラリンピックに関してが、主なセミナー内容ですが、それ以外に子どもたちと触れ合う体験であったり、障がいのある人たちと一緒に体験したり、お互いに話しをする機会をいただきました。その他にも、記念樹を植えるといったすごいことも体験させていただきました。その他に日常では体験できないホームステイもすることができ様々な貴重な経験をさせていただきました。

今回研修に参加して、以下4点について日本との違いや自分達も考えていかないといけない点、そして感じたことを記載します。

1. オリンピックについての認識
2. スポーツ施設
3. 障がい者を含めたスポーツ
4. 生活について

1つ目のオリンピックの認識についてですが、2020年オリンピック・パラリンピックの開催が間近に迫ってきていますが、日本ではなかなか直前にならないと盛り上がってこないのではないかと感じています。東京から離れている地方部では特にその傾向があるのではないかと思います。もしかしたら、冬のオリンピックを含めると3回目ということも関連するかもしれませんが、観光立国を目指している日本としては少し寂しい事態です。もちろん直前になれば盛り上がると思いますが・・・。今回ドイツに行って、話しを聞き感じたことの中の一つとして、教育の場などにおいてドイツではオリンピックとはなんぞやと行った部分がクローズアップされる機会が多々あり、日本とドイツでの違いが明確でした。日本では開催地周辺及びキャンプ地候補の地域ではオリンピックについてのことが取りざたされ、競技や国のことについて知識を深める行事などを行っていますが、その他

の地域ではほとんど行われていないと思います。

ドイツでは、開催国ではないけれどオリンピックに関して、全てのところで行なっているというわけではありませんが、学校などと連携してオリンピック教育を行なっていました。オリンピックの年に合わせて教材を作成しています。主に競技のことや開催国のことについて載せています。競技の記事では、何点かのスポーツをピックアップして競技の内容や今までの歴史などを題材にしています。開催国についての記事は開催国の歴史や文化などが記載されています。その国の言語であったり、歌や遊びなども載っていました。現在の日本の教育はわかりませんが、少なくとも私の幼少期ではそういったオリンピックを通じた異国の文化と触れ合うといった教材や機会はなかったと思います。

これから 2020 年に東京オリンピックを迎えるにあたって、オリンピックを通して各国の交流や今までやったことのないスポーツを観戦・体験してみるといったことを積極的に行っていく必要があるのではないかと思います。

2つ目のスポーツ施設についてですが、日本でも数多くのスポーツ施設はありますが、ドイツでは、プロスポーツと一体で運営している施設や、州の強化選手が利用できる環境を整えた施設が多くありました。もしかしたら私たちの身近にもあるかもしれませんが、私たちが伺った施設では整った競技環境があり、もちろん強化種目によってはその州にはないといったこともあります。オリンピックの競技になっているものであれば州のどこかには必ずあるようです。日本では主にナショナルトレーニングセンターに集約されているのではないかと思います。日本でももっとプロスポーツと地域が密着した施設ができるとスポーツに対しての取り組み方がさらに違ったものになっていくのではないかと考えます。

地域密着型のプロスポーツがあることによって、スポーツに参加することだけでなく、観戦したりすることもできます。観戦することによってさらに身近に感じることができ、さらに盛り上がっていくと思います。日本では特にテレビ中継をしているプロスポーツとして野球及びサッカーが多くの人に認知されています。私も野球観戦やサッカー観戦は行ったことがありますが、そんなに頻繁に観に行っているわけではありませんし、金銭的な問題もあります。しかしながら地元のチームがあることによって地域でのスポーツを観たりする機会が増えると思うので今ある地元のスポーツを再度見直してみたいと思います。

3つ目の障がい者を含めたスポーツについてです。日本でも新しく策定されたスポーツ基本法に、障がいに関係なく誰でもスポーツをできる環境を整えていくといったようなものが考えられています。

ドイツではそれに先駆けて、地域スポーツだけでなく、学校においても障がいにかかわらず一緒にスポーツおよび授業などが行なえる環境整備を始めています。お聞きしたところ、まだ学校教育については、始まったばかりで試行錯誤の段階のようです。

見学した学校では授業中に使う机や校舎内の段差など大掛かりな工事をしないでも簡易的なものなどを準備しながら誰でも参加できる環境を整えるための努力を行なっていました。できることは少しずつ進めていくことで金銭的な部分でできない部分もカバーしていると感じました。必ずしも全てのことを一緒に行うのが良いかはやってみないと分からない部分が多いですが、一緒に行なっていける部分を増やしていくことで幅広い選択肢ができるのでドイツでの取り組みはいいのではないかと思います。日本でも全てが当てはまるものではありませんが、良い部分は取り入れて全ての人が活動しやすい環境を整えることが出来るように自分でできることから行なっていきたいと思いました。

4つ目にドイツでの生活ですが、当然違っていることがいっぱいでした。食生活はもちろん違いますが、特に感じたのが列車への考え方でした。日本ではほぼ定時運行ですが、ドイツでは定時運行がほとんどない状態で1時間遅れや運休なども突然起こるそうです。常態化しているので遅れる可能性があると思って行動もしていますが、周りの人も列車だから仕方ないねと言った話になるようです。日本では考えられませんが、こういったことも実際に行ってみないと感じられない部分でした。

生活や文化も様々、違う部分は多いですが、スポーツなどの交流を通じて、言葉が通じなくとも一緒に活動ができ、生活ができることはいいことだなと感じました。

ドイツでホームステイも行い久しぶりに学生時代を思い起こすようないい機会を持つことができました。これからもドイツとの交流を密にして多くの人にこの研修にも参加していただきたいと感じました。

そして最後になりますが、私を迎え入れていただいた家族の皆さま、そして現地及び日本で様々な活動を支えていただいた皆様に感謝いたします。このセミナー及び日独間での素晴らしい交流が今後とも続くことを期待いたします。

「2018 年日独青少年指導者セミナー」参加報告書

三重県 關 忠郎

はじめに9月8日(土)、9日(日)岸記念体育会館に今回派遣される2018年日独指導者セミナーの皆さんとの初めての顔合わせがあり、期待と少しの不安を持って臨みました。皆さん方は、東海、北陸、関東地方で、年齢も20代から60代の各層の人達でした。

8日(土)はドイツについての概要等の話があり、その国のことがわかり、今回のテーマの「Road to TOKYO2020 オリンピック・パラリンピックムーブメントについて」の研修が行われました。

私のテーマは、

- ① 障がい者とどのように接しているか
- ② 日本とドイツの指導方法の仕方です。

我が団は10年前に旧久居市にあり、25団体のスポーツ少年団でしたが、2008年に2市10町が合併して、125団体もある大所帯になりました。

そしてドイツとは2008年に団員を受け入れ、2017年には指導者5名を受け入れ交流を重ねてきました。

2017年に日本へ来た指導者の方と団の受け入れ先の保護者の方が、メールのやり取りをしていて、今回私が行くことになった時には、ぜひ空港に迎えに行くと連絡があり、再会できることをうれしく思っています。

10月6日(土)空港近くのホテルに全員集まり、いよいよドイツへの出発前日の夕食は、最後の日本食を食べながら、話が尽きませんでした。

10月7日(日)午前11時25分に成田空港を出発して、フランクフルトには、16時40分に無事到着しました。

そこにはドイツスポーツユースの職員の皆さんとこれから2週間お世話になる通訳さんなど出迎えを受け、その中には、懐かしいハイケさんがご夫婦で迎えに来てくれて、久しぶりの再会に嬉しかったです。



○ドイツスポーツユーゲントについて

ドイツスポーツユーゲントとは、日本のスポーツ少年団と同じような役割で、27歳以下の約1,000万人の会員を有している。

- ①種目別競技団体
- ②各州のスポーツ連盟
- ③その他のスポーツ関係団体（ドイツ大学スポーツ連盟など）

の3領域の加盟団体があり、スポーツクラブを基礎としている。

日本では、地域、学校の施設等が中心で、小学生、中学生が活動している。また、中学、高校になると、各学校のクラブに入り、両立が難しい所がある。

そこでは、運動カレンダーを作って利用しているとのことでしたが、見る事ができませんでした。

スポーツを通して

- ①人格形成
 - ②スポーツをやる楽しみ
 - ③統合能力を高める
- 等のことを思って取り組んでいる。

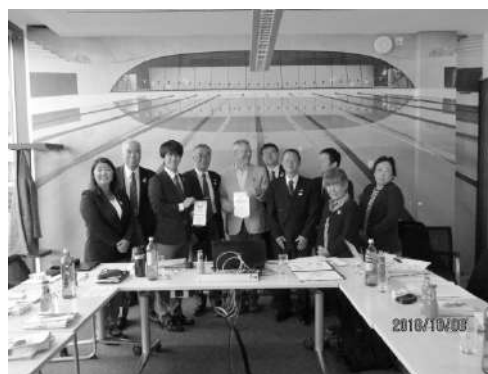
○オリンピックムーブメント

オリンピックアカデミーの授業では、先生が授業で使えるように内容が作っており、日本との違いがある。

各種大会などで良い成績を収めた子は、上の段階へと上がって行くようになっている。各州に良い施設が有り、使えるようになっている。

スローガンは

- ①ベストをつくせ
- ②あきらめない気持ち
- ③出来る喜びを味わう
- ④負けた時の気持ち
- ⑤長い目で見ろ



○パラリンピックムーブメントについて

色々な障がい者の連盟があり、スポーツ大会にはオリンピックを目指す大会と、同じ場所でパラリンピックの種目をしているけれども、同時にやることは、色々な制約がありなかなか難しい。

指導者は、健常者と障がい者とをうまく結びつけるように努力はしている。

障がい者の人たちの宿泊所はバリアフリーが進んでいるが、日本では、まだまだ、介護施設をホテル代わりにした例があり、2020年東京大会では、健常

者と同じ施設を使うと思うので、使う人の身になって造っていくと良いと思う。

ヘルマン・ノイベルガー・スポーツシュレーの連邦強化拠点で、ランニングマシンに乗って、色々な数値を測定してその人に合った指導方法などを研究する機関が各州に有り、競技力向上に役立てている。

午後、スポーツシュレーでインクルージョン、スポーツデーが有り、我々も参加させてもらって、障がい者との交流を行った。

そこにはゲームを入れた実技体験を行っていた。

又、団員を募集するときには、どんな障がいがありますかというのではなく、何か支援することがありますかという言葉の選び方をするとよい。

障がいのある子に合わせて行動をするのが理想的ではあるが、中々難しいように思える。

共同生活学習支援団体のインクルージョン共同住居グループ訪問は、四階建ての二階部分のフロアで共同生活をしていた。

若者が宿泊をしながら、障がい者を見守っているようでした。

日本では、障がい者に対する偏見があるが、うまくいっているようでした。

I) CD J ホンブルグ (キリスト教社会教育施設) の見学

広大な敷地の中には4つの建物があり、その中に16歳～24歳までの障がいのある人が430人あまり住んでいる。

その内訳は、64%が知的障がい者で、残りは身体障がい者であり、80人ほどの移民の人もいる。

その施設には、ハローワークと提携して決めている約40種類の訓練内容があり、その中から自分に合ったものを選んでやっている。

今回はホエと園芸を見学させてもらった。

みんな生き生きとして作業をしていた。

II) ホンブルグのスポーツセンター訪問

スポーツ施設の見学では、柔道場があり、畳は日本の半分の大きさのものが敷かれていました。

そこで、ヘアリスさんと会い、柔道の話を行いました。

会員は、200人いて、そのうち160人が本会員であり、50年の歴史ある道場でした。ヘアリスさん自身も講道館へ行って形の勉強をされたということでした。



○ホームステイ先にて

13日(土)

ザールブルッケンから、ホストファミリー宅のあるジンツハイムに向けて出発、夕方到着し、そこにはたくさんの人達が私達の顔写真入りのプラカードを準備してくれていたのので、自分がどのファミリー宅に伺うのかすぐに分かり大変良かったです。



歓迎式には、生バンドがあり、和気あいあいのムードでバーベキューパーティーが始まりました。

私のホストファミリーは柔道の指導者で、クリスさんと妻のヤニーニさん、3ヶ月の女の子のピアちゃんと、祖母のヘレナさんが揃って、待っていてくれていました。飲食を共にしながら町の話とか柔道の話で盛り上がりました。

I) フランスのストラスブールへ

日本では海外に行くには海を渡らなければならないが、大陸では川の向こうが他国というところがあり、入国したとは実感がなかった。フランスの景色を見ていると、ドイツとあまり変わりがないように思われたが、話を聞いていると、ドイツの方は戦場となり、焼きつくされたようで、新しい建物が建っていた。

一方でフランスの方は、昔の建物がたくさん残って、大聖堂の規模の大きさには目を見張るものでした。天気が良く、大聖堂の上からの景色は最高でした。

ミニトレインで市内観光をして、歴史の重みを感じた。

ジンツハイム市長と朝食を共にし、近くのストリートで記念植樹をし、友好を深めることができた。

夜はカラカラ浴場に入り、友情を深めるとともに、旅の疲れを取る良い機会でした。



○研修地オリンピック・パラリンピックの強化拠点

I) サンドヴァイヤー基礎小学校を訪問

テーマは、学校とスポーツにおけるインクルージョン

その小学校は、1年生～4年生まで120人が在籍している。

その中で、4人の障がい者がいて、1人は車いす、1人はヘッドギアを付けた子、学習障がいのある子がいた。

学校の時間を見学させてもらった。1クラス30人ぐらいで、大きいボールに小さいボールをぶつけて相手の陣地に運ぶゲームを見ていたら、車いすの子とか障がいのある子にもボールが投げられるように、皆で協力しあっていることは大変よいことです。

そこには体育の先生のほかに、3人のヘルパーがいました。ヘルパーは免許はいらないとのこと。その人達は、自分の子どもではなく、親から頼まれた民間の人でした。

その人たちを雇うのは、学校の支援会があり、お金を出し合っている。

在校生の親とか卒業生が出し、運営には後援会があり、その子達を支えている。



II) 障がい者スポーツ連盟

会員数は40,000人おり、良い選手を発掘していく。

重点スポーツは、卓球、クロスカントリー、柔道、車いすバスケット、水泳などで、強化拠点地域になっている。

その日の夜は、さよならパーティーで、柔道の練習と、合気道の練習を見せてもらい、私も一緒に柔道をしました。

どのような練習をしているのか興味があり、ドイツの方も同じ思いでした。

後日、日本の練習をCDに撮って、今回来日するドイツ団の人に渡すことを約束しました。

さよならパーティーでは、2020東京五輪音頭を皆で踊り、会場を盛り上げました。話は尽きることなく、夜遅くまで話がはずみました。



Ⅲ) フライスブルグのオリンピック強化拠点を見学

列車で移動する予定が、90分の遅れのため、急きょ車での移動になり、慌ただしく荷物の積みかえをし、アウトバーンで、次の目的地に向かって出発した。その時、日本の高速道路では、なかなか経験できないスピードで走行し、無事到着した。

その施設には、強化選手が16歳～24歳ぐらいの約200人がいて、食事、医療のケアがなされている。

この様な施設は全国に19施設あり、それぞれの強化種目



に分かれている。その施設の中には、幅5メートルのランニングマシンがあり、トライアスロンなどの強化に使われているとのことである。

また、選手たちは、引退後は、警察官、軍隊、消防士、プロのサッカーのコーチなどに就職している。

○評価会

①オリンピック・パラリンピック

オリンピック・パラリンピック種目の施設の充実を見せてもらったが、実際選手たちがどのように使いこんでいるかを見学し、話も聞く機会があれば良かったと思うし、日本のオリンピック選手などが使う施設を見学できていれば、どのへんが違うのかがよく分かったように思える。

施設は各州に点在していて、充実しているように思われた。

②インクルージョン

区別と差別の違いを歴史的に理解されている。それは戦争であったり、難民についても国の政策でやっている。

日本では、なかなか難民の受け入れは難しいが、労働力はほしいところがあり、難しい問題である。

助け合い精神（ギブアンドテイク）で、行動が先で、建物（ハード面）などが後からついてくる感じである。

職業訓練を受けている人たちも明るく、前向きに取り組んでいる。

日本でもドイツでもスポーツデーのようなイベントをしても、なかなか集まりが悪く、特に健常者と障がい者が同じようにすることがないように思われる。

もっと積極的に両方の人達が話し合いをしていけば、良い大会になっていく

のではないか。

③ ホームステイ

日程的には3泊4日がちょうど良かったと思う。

相手先にもいろいろと負担をかけるので、前にも書いたように歓迎式にはたくさんの方の出迎えを受け、生バンドまで、くり出してくれて素晴らしかったです。

食事の後は、夜遅くまでワインを飲みながら、話が尽きませんでした。

④ おわりに

訪問先を事前にもっと調べておけば良かったと思った。

ファミリーの情報をもっと早くわかっていたら、もう少し準備ができたと思う。

移動も電車より車での移動のほうがスーツケースを何回も積み下ろしをしなくてもよいのではないか。

日本も欧米に追いつけ、追い越せで、色々なことに取り組んでいるが、日本では、小学生はスポーツ少年団に入り練習し、中学、高校は、各学校内のクラブに所属し、一貫性がなく、先生方の指導方法がかわってくるのが良いのか悪いのか研究する余地がある。

今回、ドイツへ行かせてもらって、素晴らしい7名のメンバーと2週間共にしてきた、通訳のデップ知世さんには、色々とお世話になり、感謝の気持ちがいっぱいです。

ドイツで知り合った柔道関係者の皆さんと今後の団同士のつながりをしていきたいと話し合いました。

それと同時に、益々青少年の健全育成と地域のスポーツ振興に、しっかりと取り組んでいきたいと思いました。





結団式



ペナント交換



歓迎式



レクチャー「オリンピックムーブメント」



初日昼食



DOSB



フランクフルトサッカースタジアム見学



ザールブリュッケンにて歓迎式



ヘルマン・ノイベルガースポーツシュレ施設見学



スポーツ・予防医学研究所でランニングマシン体験



インクルージョン・スポーツデー参加



ビレロイ&ボッホ博物館訪問



ザールシュライフェ渓谷



3ヶ国エック



CJD ホンブルクススポーツ施設見学



ローマ博物館見学



ジンツハイムにて歓迎式



ホームステイファミリーと対面



ジンツハイムにて植樹セレモニー



バーデンバーデン市内観光



ザンドヴァイヤー基礎学校訪問①



ザンドヴァイヤー基礎学校訪問②



オリンピック金メダリストと会食



ラシュタット・ファヴォリーテ城見学



ジンツハイム柔道連盟の稽古



さよならパーティー



フライスブルグ・オリンピック強化拠点見学



強化拠点の選手とディスカッション



レクチャー「パラリンピックムーブメント」



評価会

ドイツ団受入報告



2018年日独スポーツ少年団指導者交流受入日程

期日／ 滞在地	時間		会場等	宿泊先
11/3(土) 東京都	8:55 9:30 11:00 12:00 13:00 14:20 18:00	ドイツ団来日(LX160) バスで移動 ホテル到着 昼食 新国立競技場視察 JSPOレクチャー(～16:00) 歓迎式・歓迎夕食会	成田空港 新国立競技場 ホテルサーブ渋谷 権八 渋谷	<ホテルサーブ渋谷>
11/4(日) 東京都	8:00 9:00 10:30 昼食 13:00 17:00	朝食 ホテル発 味の素スタジアム視察 昼食 都内自由研修 夕食	味の素スタジアム	<ホテルサーブ渋谷>
11/5(月) 東京都 ／山形県	6:45 7:15 8:24 10:28 10:57 12:45 14:00 17:00 18:30	(朝食) ホテル発 東京駅発(Maxとき307号) 新潟駅着 新潟駅発(いなほ3号) 鶴岡駅着 レクチャー/意見交換/施設見学 ホテル着 歓迎会	鶴岡市小真木原公園/総合体育館 東京第一ホテル鶴岡	<東京第一ホテル鶴岡>
11/6(火) 山形県	7:30 8:30 9:00 10:30 12:00 13:15 15:30 17:30	朝食 ホテル発 玉泉寺見学 羽黒山登山 昼食 歴史博物館 羽黒高校部活動見学 ホテル着 夕食	玉泉寺 鶴岡市羽黒町 出羽三山歴史博物館 羽黒高校	<東京第一ホテル鶴岡>
11/7(水) 山形県	7:30 8:30 9:00 11:00 13:00 14:00 16:30 17:30 19:00 21:00	朝食 ホテル発 水族館見学 小学校授業見学 昼食 荘内神社・鶴岡公園周辺散策、市役所展望台 鶴岡市民プール見学 夕食 夜のスポーツ活動見学 ホテル着	加茂水族館(鶴岡市) 朝陽第二小学校 学校給食 鶴岡公園、鶴岡市役所 鶴岡市民プール ピソリーノ 小真木原公園、朝陽武道館	<東京第一ホテル鶴岡>
11/8(木) 山形県 /秋田県	7:00 8:10 9:00 10:30 12:00 14:00 15:30 16:30 18:00 19:30	朝食 ホテル発 中学校体育授業見学 日本舞踊鑑賞(～11:30) 昼食 鶴岡出発 市長表敬訪問 中学校部活動見学 歓迎会 ホームステイ先へ	鶴岡第五中学校 相馬楼 伊豆菊 にかほ市象潟市庁舎 象潟中学校 八千代寿司	<ホームステイ>

期日／ 滞在地	時間		会場等	宿泊先
11/9(金) 秋田県	8:30 9:00 10:00 12:00 14:00 17:00 17:30 19:00	集合 小学校授業参観 保育園参観 昼食 企業・市内見学 太鼓体験 夕食 ホームステイ先へ	金浦小学校 勢至保育園 TDKゲストハウス TDK歴史みらい館/フェライト科学館/白瀬記念館 象潟構造改善センター ボンボニエール	<ホームステイ>
11/10(土) 秋田県	9:00 12:00 13:30 14:30 16:00	集合 スポーツ少年団活動 昼食 スポーツ施設見学 意見交換 ・秋田県のオリパラ取組紹介、ディスカッション ホームステイ先へ	仁賀保体育館 ホテルエクセルキクスイ TDK-ASC 仁賀保公民館	<ホームステイ>
11/11(日) 秋田県	9:00 18:00	集合 各ホームステイ先プログラム(文化活動含む) ホームステイ先へ	各ホームステイ先	<ホームステイ>
11/12(月) 秋田県 ／東京都	9:00 9:15 11:30 13:06 17:04 18:00	集合 バス移動 昼食 秋田駅発(こまち24号) 東京駅着 夕食	秋田ビューホテル 渋谷駅周辺	<ホテルサーブ渋谷>
11/13(火) 東京都	8:00 9:00 9:30 11:00 12:00 15:00 18:00	朝食(6:30～OK) ホテル発 都庁展望室見学 組織委員会視察・レクチャー(～12:00) 昼食 スポーツ施設見学(～16:30) 送別夕食会	東京2020大会組織委員会(新宿)11-G 味の素ナショナルトレーニングセンター とりかく 渋谷宮益坂店	<ホテルサーブ渋谷>
11/14(水) 東京都	8:00 8:30 10:00 16:30 19:00	朝食(6:30～OK) ホテル発 大学視察 施設見学/授業参観/ディスカッション/昼食 移動 ドイツ団-JJSA評価会 夕食	立教大学新座キャンパス	<ホテルサーブ渋谷>
11/15(木) 東京都	6:30 8:30 10:40	ホテル出発 成田空港到着・チェックイン 帰国(LX161)	成田空港	

● 来日ドイツ団名簿

団長	Heitzmann Matthias	ハイツマン・マティアス	バーデンスポーツユース
	Levintova Eva	レヴィントヴァ・エファ	ブランデンブルクススポーツユース
	Krüger Hanno	クリューガー・ハノ	スポーツユース・ノルトライン＝ヴェストファーレン
	Wiese Peter	ヴィーゼ・ペーター	ドイツ柔道ユース
	Portscher Jan	ポルチャー・ヤン	スポーツユース・ヘッセン
	Pickardt Lars	ピッカート・ラース	ドイツ障がい者スポーツ連盟
	Lindner Jenny	リンダーナー・ジェニー	ドイツ自転車・インラインユース

●東京都プログラム（前半）



成田空港に到着



新国立競技場の建設現場視察



神宮外苑を散策



施設見学（味の素スタジアム）



在日ドイツ大使と対面



歓迎会の様子

●山形県プログラム



鶴岡へ移動



鶴岡市でのレクチャー



視察見学（小真木原公園）



歓迎会の様子



地元単位団の活動に参加・見学



高校運動部活動を視察



施設見学（鶴岡市民プール）



小学校の訪問



中学校の授業に参加



相馬楼

●秋田県プログラム



歓迎セレモニー



地元小学生との交流



中学校運動部活動を視察





地元のダンススポーツ少年団と交流



ホストファミリーと対面



保育園での幼児体育に参加



九十九太鼓の体験



市内全団交流会に参加



意見交換



地元単位団の新米の会に参加



ホストファミリーとのお別れ

●全体プログラム（後半）



東京 2020 大会組織委員会を訪問



大学の授業での意見交換

本報告書に関する内容について無断での複写・転載を禁じます。
2018年日独青少年指導者セミナー報告書 平成31年2月12日発行
公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団
TEL:03-3481-2222 FAX:03-3481-2284



公益財団法人

日本スポーツ協会